慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾精干社の人々：明治演説史のひとこま
Sub Title	
Author	松崎, 欣一(Matsuzaki, Kinichi)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1987
Jtitle	近代日本研究 Vol.4, (1987.) ,p.69- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤門下生特集 挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19870000-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾精干社の人々

——明治演説史のひとこま——

松崎欣一

一　はしがき
二　精干社についての基礎資料
(1)慶應義塾入社帳・同学業勤惰表から
(2)森田日誌から
三　精干社員と諸演説会
(1)三田演説会
(2)学外における演説会
(3)交詢社巡回演説会
四　精干社人物誌

一　はしがき

慶應義塾福澤研究センターに寄託されている福澤家旧蔵の多くの資料のうちに掲出の一枚の写真(A)がある。すでにかなり褪色が進んでいるが、一九名の青年達がいずれも和服の着流しでそれぞれに個性的な面持ちで思い〳〵のポーズをとって収まっている。裏面には「呈福澤先生　慶應義塾精干社員、明治十二年十二月十四日」とあって、さらに二段に分けて一九名の出身地と氏名が列記されている。上段右側より「大分県・和田基太郎、

愛媛県・梅木忠朴、山口県・波多野一、群馬県・高嶋鉱橘、鹿児島県・池内源太郎、兵庫県・広田輹平、愛媛県・宮内直挙、東京府・高橋正信、青森県・阪(坂)井次永」とあり、下段には同じく右側より「鹿児島県・枝元長辰、三重県・久野英吉、高知県・盛喫(矢)三郎、静岡県・黒川正、愛媛県・渡辺脩、高知県・国枝義光、同・岩崎居貞、愛媛県・豊嶋(政雄、浅岡)満俊、高知県・井出徳太郎、和歌山県・森田勝(勝之助)太郎」とある。

写真の方では三列に並んでいるのでそのまま氏名と対応させることはできないが、他の写真資料[1]により後列右から二番目が梅木忠朴であり、中列右端が渡辺脩であることが確認できること、また森田勝之助の孫にあたる現森田家当主の森田治利氏より、治利氏及び母堂の見解として同年代の写真がなく確定的なことはいえないが前列左端の人物を勝之助としてよいとの回答を得ていることから、次のように判断できる。

すなわち、後列右側より「和田、梅木、波多野、高嶋、池内、広田、宮内」、中列右側より「渡辺、黒川、盛、久野、枝元、坂井、高橋」、前列右側より「国枝、岩崎、豊嶋、井出、森田」である。

ところでこの写真は福澤研究センターに収蔵されて長い間いわば忘れられていたといってよいのだが、先年、和歌山県史編纂室による県下の史料採訪の過程で、梅渓昇氏により伊都郡かつらぎ町の森田家から明治一〇年代前半に慶應義塾生であった森田勝之助（のち、庄兵衛）の塾生時代の日誌（以下、「森田日誌」とする）が発見され、その日誌の調査により写真の背景が明らかになったものである。[2]

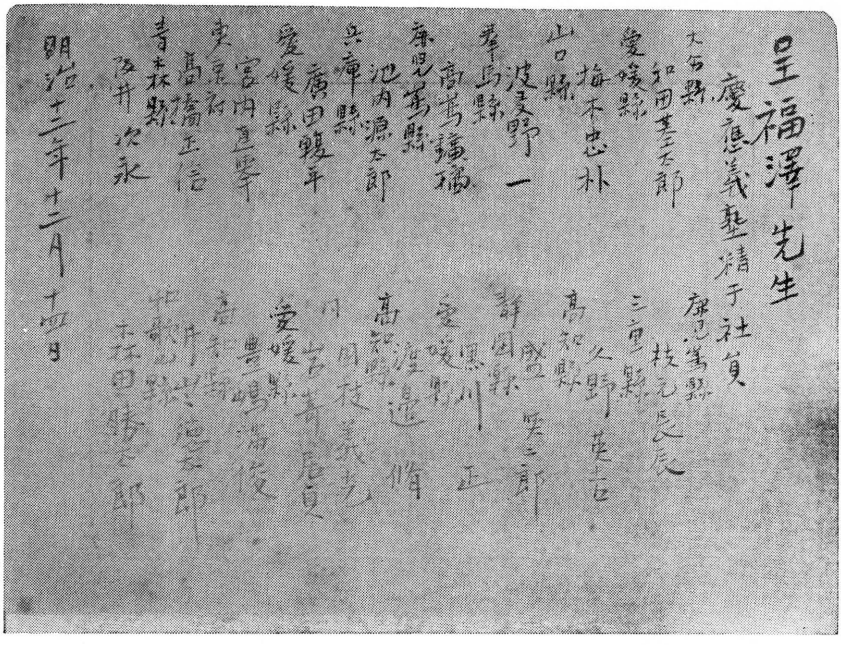
すなわち「精干社」とは当時の慶應義塾内に結成されていた学生の演説グループの一つであること、またその日誌の明治一二年一二月五日の記事[3]の一節に、

直チニ義塾ニ到ラントテ八百吉角迄行キシトキ、精干社々員某同社ノ廻章ヲ持チ来リ余ニ渡セリ。此事ハ余昨宵坂井次永氏ヨリ伝聞セシ故、塾ニ往カントセシナリ。即チ某ト伴ヒ塾ノ十四番講堂ニ至レハ皆集会セリ。喋々弁ヲ費シ、

（A） 精干社員集合写真

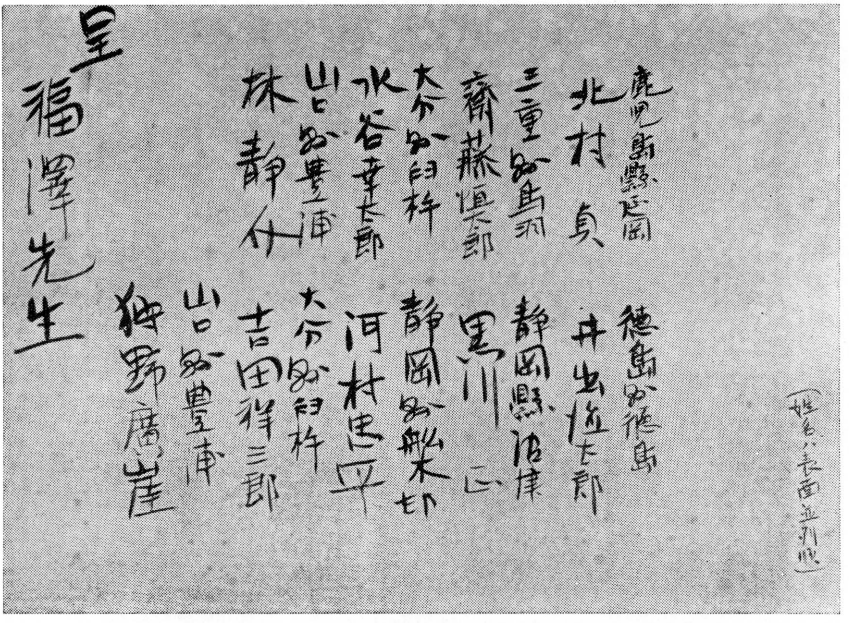
（表）

（裏）



（B） 明治13年１期本科１等在籍者集合写真 （表）

（裏）



竟ニ午後一時三十分ヨリ精干社々員日影町竹谷ナル写真屋ニ行タリ。此日、朝ヨリ実ニ好天気ナリシニ、二時前ヨリ俄カニ曇リ竹谷ニ掛ケ合ヒシニ、トテモウツラジ、然シ経験ノ為ウツサント。乃写セシニ紙写(ママ)シニナラスト言エリ。廼チ翌日ヲ期シテ復途山内徳川廟ヲ見テ而テ順路還リ（以下略）

とあり、また同月九日の記事の一節に、

折柄、豊嶋某氏来リ曰ク、精干社々員集会セリ。今ヨリ写真ヲ模シニ行カント。輒チ共ナハレテ日影町竹谷ニ之キ、三時ニ及ヒ模シ終リ而シテ還ル。

とあることに対応する写真であることなどが、明らかになったのである。山内とは学校の北の方向に位置している増上寺境内のことであり、日影町はさらに増上寺を越えて北方に位置して現在のＪＲ線新橋駅近辺にあたる。なお「森田日誌」中の現金出納記録によれば、一二月一二日の出金として「精干社写真代十五銭、精干社出金一銭」があげられている。また同月二一日の記録として、「精干社員真影割合一銭。是レハ小幡子ェ送ル写真ナリ」とある。これは小幡篤次郎のことかと考えられる。福澤に対すると同様に写真を贈っているのは、塾内における小幡の重要な位置を示すものであろう。この写真撮影のことのあった前月二七日の日誌の一節に、「山本義平氏室ニ入リシ蜂須賀次郎、野田精一郎、松本重太郎、岡村幸作四氏ト山本氏ニシテ、神明ニテ安価ナル写真商ノ広告アリシヲ以テ、今ヨリ取(ママ)影ニ行カントセシ所ニシテ余ヲ勧タレド余応セス。」という記事もある。また精干社員の集合写真とほぼ同時期に撮影されたと考えられる九名の塾生の集合写真一葉(B)[4]がやはり福澤家旧蔵資料中に含まれており、これにも写真の裏面に「呈福澤先生」とあって塾生の出身地と氏名が列記されている。当時、こうした写真撮影が時代の先端をいく一つの流行のようなものとなっていたことが窺われる。

すでに前稿[5]において「森田日誌」の概要について報告したが、本稿はこの日誌を出発点としてさらに関連の資

料も求めながら「精干社」そのものに焦点をあて、明治一〇年代前半の慶應義塾における一群の青年達の生活とその後の軌跡についてとくにいわゆる「演説」を軸として追跡してみようとするものである。それはまた当時の東京という環境を背景として主体を形成した人々が、日本の近代化過程のさまざまな場において果した役割を考えるための一つの資料を提供することにもなるはずである。

(1) 梅木について「四十年前の恩師草間先生」、渡辺について「慶應義塾出身名流列伝」にそれぞれ所収の写真による。
(2) 梅渓昇「和歌山県下かつらぎ町の新資料について——明治初期塾生日誌と福澤諭吉書簡——」(「福澤手帳」20号所収)
(3) 「森田日誌」の引用等については「森田勝之助日誌」(「慶應義塾福澤研究センター資料 (1)」による。(以下この点についての注記を省く。)
(4) 鹿児島県延岡・北村貞、三重県鳥羽・斉藤恒太郎、大分県臼杵・水谷幸太郎、山口県豊浦・林静介、徳島県徳島・井出徳太郎、静岡県沼津・黒川正、静岡県船木村・河村忠平、大分県臼杵・吉田祥三郎、山口県豊浦・狩野広崖の計九名の集合写真である。井出及び黒川は精干社員である。明治一三年第一期(一月〜四月)の「慶應義塾学業勤惰表」(慶應義塾福澤研究センター所蔵)によればこの九名がそろって本科一等に位置しておりそのうち斉藤、水谷、狩野、林、黒川、吉田が卒業の資格をえている。この記念写真かと思われるものである。
(5) 松崎「明治十年代前半期における慶應義塾の塾生生活——和歌山県妙寺町・森田勝之助の日誌——」(上・下)(「史学」52—3・4合併号、53—1所収)

二 精干社についての基礎資料

(1) 慶應義塾入社帳・同学業勤惰表から

慶應義塾におけるいわゆる演説の実践が、明治七(一八七四)年六月の三田演説会の発会と、翌八年五月の三田

演説館の開館によって展開していったことはよく知られている。これはいうまでもなく福澤諭吉とその周辺の人々を軸とするものであったが、一方、ほぼ同時に学生たちにより組織された演説グループ[1]の活動もあった。明治九年末頃に結成された波多野承五郎、本山彦一、加藤政之助、尾崎行雄、桐原捨三、松木直巳、古渡資秀、吉良亨らによる「協議社」、一一年七月頃に組織された犬養毅、高島小金次、林欽亮、永井好信らによる「猶興社」があり、そのほか「自由社」「自立社」「有終社」などの名が知られている。

「精干社」もそうしたものの一つであったと考えられる。これは先にも述べたように「森田日誌」により初めてその存在が知られるようになったもので今のところこの日誌と図版の写真以外の資料は見出せない。「精干社」の字義についても未詳である。第1表（以下、表は末尾に収載）は写真に集った精干社員一九名とこれ以外に「森田日誌」にみえる人物で社員とみてよいのではないかと思われる奥田直之助及び蜂須賀次郎を加えた計二一名について、慶應義塾入学者の記録である「慶應義塾入社帳[2]」（以下「入社帳」）及び「慶應義塾学業勤惰表[3]」（以下、「勤惰表」）を拠りどころとしてまとめたものである。第2表は同じく二一名について、「学業勤惰表」によりその進級状況を表示したものである。

まず出身地について、表中の県名は入社帳の記載そのままとしてある。県域、県名が固定していない頃であって現在のそれと異なるものがある。例えば盛、井出、岩崎は現在の県域では徳島県とすべきものである。二一名を現在の県名で分類すると愛媛四名、徳島四名、高知一名で四国勢が計九名である。広田輹平は淡路島出身でありここも元来は徳島藩領であったのでこれも含めれば四国勢は一〇名としてよいかもしれない。この他に鹿児島三名、大分一名で九州勢四名、残る八県各一名となっており地域的にかなり偏りがある。その理由はグループ結成の経過の中にあるのであろうが今のところ不明である。

族籍については高島の入社帳の記録にその記載がなく、森田についても入社帳の記録そのものがないので共に除くと一九名のうち平民二名で他はすべて士族である。明治一〇年から一五年までの六年間の全入学者一三四八名の族籍をみると華族一一名、士族五七〇名、平民五八〇名、不明一八七名であって士族と平民の割合はほぼ同じである。[4] このことからすれば精干社の族籍の構成にもかなり偏りがある。この演説グループの結合要素の一つに族籍が作用したのか、あるいは士族階層の方により演説への関心が高かったのかいずれかであろうが、この点についても後考をまたねばならない。

写真撮影時の年齢は高島鉱橘が最年少で一六歳六か月、最年長は二四歳一〇か月の広田輹平である。平均二〇歳弱ということになる。

この撮影時に相当する明治一二年第三期の勤惰表をみると本科一等を最上級として五等まで（五等については二分され一番と二番のクラスがある）、続いて予備科一番から三番（三番は一、二、三の三クラスある）まで、またこの他に科外甲、乙、丙のクラスがある。精干社員の所属クラスをみると科外四名、予備科二名、本科一四名であり、本科も上位者が多い。全体に上級クラスの者により構成されていたことがわかる。

全体のクラス編成については、この明治一二年第三期に一部の改正がありこれ以前では本科に続く予備科が大人科と童子科に分れていた。例えば高島鉱橘の場合、入学当初のクラスは予備科・童子科三番ハであり、その後同三番ロ→予備科三番一→同二番二→同一番一→同一番と進級して明治一二年三期には本科五等になり、さらに翌年の一期で本科四等に昇級していることがわかる。

各人の最終段階で①とある者は本科一等で卒業の資格をえたことを示す。第1表の卒業年月欄で「特」とある者（宮内、豊嶋、森田）はそれぞれ卒業はしていないが当該年度より「特選塾員」[5]として卒業者の待遇を受けるこ

とになったものである。

第1表及び第2表を重ね合せてみるとまず入学年月日については明治九年より同一二年までの間であるが、広田輹平と高橋正信、宮内直挙と豊嶋満俊がそれぞれ同年月日であるなどほぼ同じ時期に入学した同窓生とみてよいだろう。ただ各人の入学年齢にはかなり幅があり、各人の年齢と学力によって適宜のクラスに位置づけられ、それぞれの進度によって昇級していく様子をみることができよう。在学期間も一様ではない。平均二年五か月ほどになる。卒業資格をえた者は一三名であるが、明治一〇年から一五年までの全入学者一三四八名のうちの卒業者が一六一名[6]であることからすると精干社員の卒業率はきわめて高いといってよい。

以上、要約すると、精干社のメンバーはそのほとんどが士族階層の出身者であり、また当時の塾生達の中で比較的年齢が高く、学力的にも上級クラスの人々を中心として構成されていたということができる。さらに出身地域別にみると四国地方を中心として西日本の人々が多数を占めていたということになる。

(2)森田日誌から

現存の森田日誌の記録期間は次の通りである。

①明治一二(一八七九)年五月一五日～六月五日

②明治一二年九月二五日～一二月一〇日

③明治一三年八月一日～九月二五日

この中で精干社に関する記事の初出は明治一二年一〇月一八日である。すなわち、

十二時過ヨリ校ニ至リ奥田直之助ノ室ニ入リシ所ロ、子ハ将ニ外出セン(ママ)スル折ナリシ。乃チ演説入社ノ手続ヲ聞キ坂

井次永氏ヲ誘ヒ演説入社ヲ申シ入レタリキ。社名ハ共同社ト名ケリ。（抹消、頭注、精干社）直チニ蜂須賀子ヲ訪ヒ談話時アッテ演説入金一銭ヲ借リ、一時ヨリ演舌館ニ造リ（イタ）、三時ニ演説ヲ終フ。余ハ演説不当番ナリシ。暫ラク社議アッテ三時四十分頃ニ解散シ、余復卒業生討論ヲ聴キ四時半頃ヨリ還リ（以下略）

とある。坂井次永と伴に精干社に入会をしその演説会に出席したという。演説館ではさらに卒業生による討論会も開かれておりそれをも傍聴しているわけで、当時の慶應義塾内での演説、討論への関心の昂まりを窺うことができる。なお先の集合写真には見えないが、日誌の文意からすれば奥田直之助と蜂須賀次郎も精干社員であったとみてよいと思われる。

ここでやや疑問が残るのは「社名ハ共同社と名ケリ」とあって後筆で「精干社」と訂正されていることである。別に「共同社」というグループがあってそれを誤記したかとも考えられるが自ら入会しようという会の名称を間違えるとも思えない。むしろ「精干社」の結成そのものがちようどこの頃のことであって、はじめ「共同社」で出発したがまもなく「精干社」と改称されたのではなかろうか。「共同社」の部分に一本の線を引くだけで頭注のかたちで訂正をしているのもそのためではないかと考えられる。日誌に会の名称が次に見えるのは約一か月後の一一月二一日であってここでは訂正なく「精干社」となっている。

精干社入会の記録以前にも「演説」についての記事が三件みられる。

○食後塾中徘徊シ三時比ヨリ演説ヲ聞キ五時ニ至ル。（五月二四日（土））

○十一時食事畢ルヤ否、岡村幸作来リ午後一時四十分頃迄無益ノ談ヲ為シ、同時ヨリ演説館ニ至リ、同五時帰寓ス。（九月二七日（土））

○十一時、食シ三田二丁目ノ斬髪屋ニ入リ、一時マテ時移リ、岡村宿所ニ之キ直チニ出テ義塾演舌館ニ至リ、五時ヨリ帰寓ス。（一〇月一一日（土））

この三回の演説の聴講は森田自身は明示していないが、他の資料[7]からいずれも三田演説会であったことが確認できる。一〇月二五日の記事として「二時ヨリスピーチハウスニ往キ五時前迄聴説シ夫ヨリ帰寓」とあるのも三田演説会であろう。その三田演説会における演説者及び演題について一括して第3表に掲げる。一〇月二五日の演説会では精干社員で入学早々の渡辺脩がさっそく演説をしているのを森田は聞いたはずである。「森田日誌」の明治一二年の記録期間中に行われた三田演説会はこの他に六月一四日、九月一三日、一一月八日、同二二日、一二月一三日であって全九回のうちとくに前半の演説会に連続して出席している。先進者あるいは同窓生の演説に実際にふれながら次第に自らも演壇に立つ関心を昂めていったものと思われる。

森田勝之助の演説については一一月一日の「森田日誌」に、「壱時ヨリ三時迄演読(ママ)。此日余ハ勇武精神論ヲ述タリ。」とある。さらに日誌には「七時ヨリ十一時マテ軍武論ニ時ヲ移シ而シテ眠ル。」(一〇月二一日)、「時ニ八時頃ト覚タリ、夫ヨリ武勇論ヲ考ヱ不知眠リ居シニ目覚メ夜具ヲ出テ着服フ(ママ)儘逐ニ夜ヲ徹シタリ。」(一〇月二四日)、「直チニ床ニ入リ尚武論ヲ読シ十一時過眠ル。」(一〇月二六日)などとあり演説の準備に相当の時間をかけていたことがわかる。また九月末からこの頃にかけて「文章ヲ作ル」「文綴」といった記録が散見するのもこのことに関係があるのであろう。演説の内容は不明であるが、尾崎行雄がおそらくこの年に芝で行われた海軍士官の会合で、国家の盛衰興亡は尚武の気象の有無によって別れるという「尚武論」なる演説をして評判になった[8]といい何等かの関係があるかもしれない。

また一一月二九日(土)には精干社の討論会で活躍をしている様子が見える。

一時ヨリ演説館ニ至リ精干社ヱ一銭出金シ、本日討論会ヲ開ケリ。発論者ハ坂井次永氏ニシテ方今我府県会代議人撰挙法其当ヲ得スト云ヘリ。余素トヨリ同意ナレ𪜈賛成者多ク抗者ナキヲ以テ喋々反対シタリキ。而シテ決ヲ取リシニ

余ノ同論多数ナリキ。三時閉会(中略)乃晩餐シ煙一契出寓時ニ少雨降レリ。走テ義塾ニ至リ幹事渡辺(部)久馬八氏ヲ尋子(ネ)シニ不在。而シテ水野勝道氏室ニ入リ直チニ出テ演説館ニ入リ自立社ノ演説ヲ一寸聞テ乃出テ岸四郎氏室ニ入リ暫ラクシテ復ル。

坂井次永とはあえて反対の立場に立ち弁論を展開して多数の賛同者をえたというわけである。この日は夜に入っても「自立社」という別グループの演説会がありそれをも森田は聴講していることに注目したい。なおこの他に精干社関係の記事が先に引用した一二月五日及び九日のそれを除いて五件ある。

○夫レヨリ還ルヤ否ヤ昼餐シタリ。刻頃ニシテ塾ニ赴キ坂井次永氏ニ面シ演説者投票ヲ渡シ山本室ニ入リ直チニ出テ三好義直氏室ニ入リ談。(一〇月二一日。頭注、「此演説者ハ来ル廿六日大宮エ出張スル者ナリ」)

○午食シ休憩ノ後、義塾中年寮三好義直氏室ニ入リ談話シ、此時友市太郎子ヨリ詩礎階梯ヲ借リ演舌館ニ往ケハ、討論将ニ創マラントセシカハ即チ一銭ヲ出シ十三番場ニ即ク。討論終リ社議アッテ幾ント四時ニ及ヒ(一〇月二四日)

○義塾ニ行キ坂井次永氏ヲ尋子(ネ)演説一日開クヤ否ヤヲ問ヒ、乃チ蜂須賀子室ニ入リ(一〇月三〇日)

○午食シ乃チ迫田子寓ニ之キ午後一時迄談話シ、乃チ出テ万来舎ニ到リ討論出席シ三時閉会ス。(一一月七日)

○一時迄報知新聞ヲ読ミ、乃同時ヨリ三時迄精干社演説出席。閉会シ即還ル。(一一月二一日)

一〇月二一日の大宮へ出張する演説者の投票というのは、この頃、埼玉県下でさかんであった加藤政之助をはじめとする慶應義塾関係者の演説活動と関係あるものと思われる。(9) この年七月には「郵便報知新聞」に福澤諭吉の『国会論』が藤田茂吉、箕浦勝人の名によって連載され、翌八月には一書にまとめ刊行されている。翌明治一三年にかけて全国的に展開された国会開設運動に大きな影響を与えたものである。慶應義塾内外に昂まった言論活動の中に森田をはじめとする精干社の人々も相当の刺激を受け演説のグループ活動に力を入れていたことと思われる。

明治一三（一八八〇）年の八月から九月にかけての森田日誌にみる塾内における演説に関わる記事は次の一件のみである。

夕食後湯ニ行キ、同七時塾ニ還ル。時ニ有終社討論客員トナリ同十時半閉会シ、雑事同十一時過臥ス。（八月二五日）

森田日誌のこの記録期間はちょうど第二期を終了して暑中休暇に入り第三期の初めにかかる時期となる。元来そうした活動の少なくなる時期であるしまた精干社員の進級状況の一覧（第2表）にみるように第二期末までに卒業者五名、他にすでに学校を離れたとみられる者が二名あり精干社の組織的な活動がすでになくなっていた可能性が考えられる。森田の参加した「有終社」については他に資料がなくその実態は不明である。

なお、八月一六日に次の記事がある。

時ニ井上子来リ通鑑ヲ持チ来リ呉タリ。雑談ノ内、本日浅草生村（井生村）楼ニ於テ印度人某ノ演説アルヲ話シタリ。此時梅木忠朴氏モ亦坐ニ在リ。共ニ行カンヿヲ約シ午前九時四十分頃皆帰室セリ。余森常樹氏室ニ至リ同行ヲ勧ム。子輙チ同伴ヲ諾ス。夫ヨリ同十一時マテ遊ビタリ。同十二時ヨリ同十三時マテ温史ヲ読ム。同時午食ヲ畢リ直チニ塾ヲ出、同行スルモノ五人。梅木、森、岡田某、井上四氏ト余トナリ。行テ新橋逮（ママ）リ馬車ニ乗シ浅草橋ニ至リ車ヲ降リ、夫ヨリ徒歩□□（井生）村楼ニ入リタリ。是レ二時三十分頃ナリキ。午後三時過ヨリ演説ヲ剏メ六時ニ終ル。尤自国今古ノ沿革ヲ述ベタリ。同楼ヲ出、浅草観音辺歩シ（ママ）某料理屋ニ入リ杯ヲ傾ケ食喫シ緩歩而塾ニ還ル。時ニ午後十一時二十分頃ナランカ。十二時ニ至リ床ニ就ク。

友人五人連れだって浅草井生村楼で開かれたインド人の演説会に出かけたのである。この演説会については当時の新聞に関係記事[10]を見ることができる。インド人とはナラヤンシエーシヤドリーなる人物で、帰国を前にした八月一六日の演説では、インドに対するイギリスの苛酷な植民支配は天帝がインドに自治の精神を振起すべく与えた試練であって早晩インドは独立を達成するはずである。現在、日印両国は相互に財と力とを以て助け合うこ

とはできないが共にその人民の幸福を天帝に祈り親交を結びたいと述べたという。井生村楼での演説もほぼ同様のものであったと思われる。森田は「自国古今ノ沿革ヲ述ベタリ」と記すだけであるが、どのような感想をもったのであろうか。

(1) 「自立社」「有終社」については「森田日誌」による。その他については「慶應義塾百年史・上」六七四～六八七ページ参照
(2) 復刻版「慶應義塾入社帳」第一巻、第二巻
(3) 慶應義塾福澤研究センター所蔵
(4) 明治一〇年～一六年の入社記録（復刻版「慶應塾義入社帳」第二巻）による。
(5) 明治四四年版「塾員名簿」による。
(6) 注(4)及び「慶應義塾総覧第二十三章卒業生」（大正四年刊）による。
(7) 「三田演説日記」（慶應義塾図書館所蔵）による。松崎「初期三田演説会資料――『郵便報知新聞』関係記事――」（「史学」55―4）参照
(8) 「旁堂自伝」四〇ページ
(9) 「埼玉自由民権運動史料」参照
(10) 『郵便報知新聞』・『府下雑報』欄

（八月一六日）今度印度国の博士ナラファンシェーシャドリー氏が渡来されしに付、二三の有志者が同氏に就て演説を乞ひしに快く承諾されしに付、今十六日をトし浅草須賀町の井生村楼に於て其国古今の沿革を演説される由、抑も印度人の演説ハ未曽有の事にして傍聴無料とのことゆえ本日ハ定めて盛会なるべし。

（八月二三日）過日浅草の井生村楼に於て演説され印度の博士ナラヤンシェーシャドリー氏ハ一昨朝、横浜出帆米郵船シチーオフトウキヤウ号にて米国へ向け渡航さるゝに臨み、其前夜同所住吉町二丁目の教会堂にて告別の演説をされしが聴衆満堂戸外に溢るゝに至れり。同氏の演説の大意ハ始めに天理人道を説き釈氏の事より印度の沿革を縷陳し、方今、英国が印度人を支配する極めて苛酷なるハ是れ印度人へ自治の精神を振起すへき幸福を与へんと天帝が英政府を仮りて此の苛酷を降し玉へるなれバ、早晩自治の精神を発揮し不羈を謀るに至らん云々と説き、余ハ明日出帆の汽船にて米国へ航し遠からず帰国すべきが、今、印度日本の間に於て財と力とを以て相助る事のならされバ互ひに其人民の幸福を天帝に祈り

て相親しむべしと懸河の如く滔々と弁せられしを以て通弁者ハ殆ど悩みたる様子でありしと。（記事の引用にあたって、漢字及び仮名ともに現行常用の字体とした。）

三　精干社員と諸演説会

(1)三田演説会

森田勝之助が熱心に三田演説会を聴講していたらしいことはすでに述べた通りである。一方、精干社員のうち何人かは三田演説会の壇上にもたっている。第4表はそれについて『三田演説日記』の明治一五年までの記録を典拠としてまとめたものである。括孤の中は「郵便報知新聞」の告知欄の記事によって補った。[1] 記事は主として演説会の開催日時、演説者、演題などを予告するもので、実際に行われた演説会の記録である「三田演説日記」と対照すると予告とのズレが間々あったことが確認できる。例えば、渡辺脩の明治一三年九月二五日の演説は実際には予告通りには行われず一一月二五日であったこと、和田基太郎や森田勝之助の場合は登壇が予告されただけに終ったことなどである。

三田演説会の演説者がどのようにして選定されたのかは必ずしも明らかではない。福澤諭吉をはじめとする慶應義塾の先進者たちが中心となっていたことはいうまでもないが、塾外者たちも登壇しており、またここに見るように当時の塾生たちも壇上に上っている。精干社員の場合、渡辺以下、和田や森田も含めれば全九名である。卒業時期の明確な者についてはそれを表示した。明治一五年までの登壇回数が最も多い渡辺脩の場合は全二六回

のうち二一回までは塾生時代の演説であった。しかも先きにもふれたように「干渉論」なる演題をかかげた第一回の登壇は入塾後間もなくのことであった。高橋は全一〇回のうち六回が塾生時代である。井出の登壇は全七回すべて卒業後であった。盛及び池内も同じくすべて卒業後に演説をしている。枝元、坂井は両者共卒業間近い時に登壇している。和田及び森田も塾生として演壇に立つはずであった。

それぞれの演説内容は残念ながら伝わらないが、最も登壇回数の多い渡辺の演題を見ると明治一三年三月までとそれ以後では傾向がやや異なっている。これは同年四月の集会条例の施行以後、渡辺に限らずいわゆる政談に関わる内容が避けられたらしくその結果であると考えられる。またこれ以後の演説会に塾生の登壇の機会が増えてくるようである。例えば七月一〇日の演説会の演説者と演題は「岡崎亀雄・世渡ノ杖。小出儀一郎・儘ナラヌ浮世。高橋正信・後見人ノ任。渡辺脩・釣リ合ノ説。林欽亮・褒美ノ説。鎌田栄吉・門閥論。福澤諭吉・苦楽ノ説。」であるがこのうちの小出（本科三等在籍）、高橋（同二等）、渡辺（同三等）の三名が塾生[2]である。「三田演説日記」にはこの日の記録として「此日炎暑甚タシト雖モ聴客三百余名ノ多キニ至レリ」と記されている。

明治一三年春からおよそ一年の間、塾内では「会議講習会（議事演習会）」が開かれていた[3]。来たるべき国会開設の準備として模擬国会を開き実習しようという試みで、福澤諭吉が教員門野幾之進、鎌田栄吉のほか猶興社の中心社員であった犬養毅、林欽亮、高島小金治らに働きかけて始まったものである。協議社の中心メンバーはこの時点ですでに卒業していた。猶興社でも林、高島は卒業をしていた。当時の塾内に誰でもが記入できる「道聴途説」という雑記帳があったが、その明治一三年三月五日の記事として

明日愈国会議事講習開会に付、狩野広崖、渡辺脩、奥田直之助、黒川正、高島鉱吉（橋）等の諸君、諸事斡旋して漸く開会の事務整理す。[4]

とある。ここにみるように渡辺以下の精干社員もおそらく現役の塾生として開会準備のための実務に携わったものと思われる。

現存する会議講習会の記録は「議事演習会記録二」のみであるが、これによると明治一三年七月一七日、九月一八日、一四年二月二〇日、三月六日の計四回の講習会が開催されている。取り上げられた議題は、憲法・総体論、憲法逐条審議・第一章人民の植利、議事講習会社則改正、対清国問題であった。社則改正が議題となった二月二〇日の会は、議長渡辺脩、幹事北川礼弼・矢田績、原案委員村田豊・波多野一・高橋正信で出席者が四回のうち最も多い七十余名であった。ここで精干社員渡辺、波多野、高橋が登場している。もっとも第1表にみるようにこの時点で波多野、高橋はすでに卒業資格を得ており、渡辺のみ塾生ということになる。

以上、精干社のメンバーの多くがとりわけ卒業期の前後において、自らのグループ活動のほかにも学内における演説・討論のいろいろな実践の機会にふれていたことをみた。

(2)学外における演説会

明治一三(一八八〇)年から一四年にかけて、ちょうど精干社のメンバーの多くが相次いで卒業の資格を得ていく頃は、また慶應義塾の外においても義塾系の人々によるさまざまな演説会が組織された時期であった。明治政談演説会、経世社、豊好同盟、東洋議政会などがその主要なものである。以下、その概要をみてみよう。

まず明治政談演説会は明治一四年四月に始ったと考えられるが、その成立の前史として前年四月の集会条例公布に伴う動きを見なければならない。一三年五月五日付の郵便報知新聞[5]の府下雑報欄に次の記事がある。

集会条例発行(ママ)以来流石に流行せる講談会も火の消へたる如くなりしに、来る八日浅草井生村楼にて慶應義塾の社中に

て条例に抵触せざる人々が公然政談演説を為すよし。昨今珍らしきことなれバ傍聴人も嘸盛んなることならん。

集会条例の影響が慶應義塾にも及んだのである。この年、四月十日に予定されていた三田演説会は「都合有之本日の壱回ハ休会致候事」と郵便報知新聞に広告を出して休会しており、同月二四日の例会も「差支有之来る廿四日ハ休会致候間此段広告す」との広告を出している。再開は五月八日であった。また六月二六日の例会については前日の郵便報知新聞に「三田演説会。来ル廿六日午後二時ヨリ。但シ政談ニアラス」との広告があり、また同日の雑報欄では「三田の演説会を問々政談演説と誤認する人もある由なるが本日の告知にもある通り全く性質を異にするものなり。」という記事が掲載されている。(6)

同条例への対応として慶應義塾の学内における三田演説会についてはこれを学術演説会として純化させ、政談演説についてはこれを明確に分離して学外に新しい組織をつくったものと考えられる。前述の五月五日付の記事と同日の告知欄によれば五月八日の政談演説会の演説者として、岡崎亀雄、高島小金治、本多孫四郎、波多野承五郎の名があげられている。なお五月七日付の朝野新聞(7)の告知欄ではこの八日の演説会について「三田政談会幹事」の名で広告が掲載されている。

この新しく結成された三田政談会という組織が核になっているかと思われるが、この後井生村楼や日吉町の共存同衆を会場とする政談演説会がかなり頻繁に開催されていることが郵便報知新聞などの記事によって確認できる。さらにそれらの記事を追うとこれらの演説会の演説者としては必ずしも慶應義塾関係者のみでなく嚶鳴社や共存同衆の人々が加わっていること、しかし明治一四年二月に開館間もない明治会堂を会場とする政談演説会が開かれたことを契機として、再び慶應義塾系の人々のみによる組織が分離し四月に至ってこれを明治政談演説会と称するようになった経過などをみることができる。

一方、同じ四月にこの一両年の井生村楼や共存同衆また明治会堂における政談演説会に参加した人々のうち明治政談演説会に加わらなかった人々がここにも馬場辰猪をはじめとする若干の慶應義塾出身の人々を含んで国友会という組織を結成して演説会活動を展開している。

三田政談会に組織としては重なるもの、あるいは全く同一のものかと考えられるが、南鍋町一丁目に政談社が組織され雑誌「中立政党政談」[8]の刊行をしている。初号の刊行は明治一三年八月であるが、その二七号（明治一四年二月二〇日号）の雑報欄に次のような記事が載せられている。

去る十三日に催ふしたる木挽町二丁目明治会堂演説開業は世人の俟ちに俟ちたることなれハ、午後より推し掛けたる聴衆ハ無慮六百名に余る程にて演説者の場に登る毎に喝采の声四方に喧しく実に近来の盛会なりき。全体這回の演説ハ政談を交へず極着実の演説のみなれハ、聴衆の人種ハ諸方の演説会とは違ひ多くハ中等以上のもののみにて、二階の一方には去る方の貴婦人も見へたりき。又此演説堂ハ西洋各国の演説館の風に倣ひ、建築学士藤本寿吉の計画する所に係るを以て、井生村や中村楼の演説の如く蒸りのお淩ひや清元の名広めと打ち混ずることもなく、人をして学士君子の演説ハ実に斯くの如きものかと恭敬の心を起さしむる者あり。又た来る廿七日（日曜日）にハ政談の演説をなして、藤田、馬場、目賀田、林、津田、岡崎、高木、波多野等の諸君も出席さるゝと云へハ定めし盛大なることなるべし。

明治会堂での演説会が比較的穏健な路線で進められようとしたらしいことを伝えている。しかし、おそらくは政府による言論統制の進展とも関わりながら、実際には演説会の性格づけについても種々の論議があり最終的には国友会系と明治政談演説会系に分離したのであろうと考えられる。

第5表は明治一四、一五両年における明治政談演説会の開催日と演説者についてまとめたものである。表中の○印は当日の演説会で演壇に立つことが予定されたことを示している（以下、各表同じ）。　両年の演説者は計三六

名であるがこのうち精干社員は渡辺脩と枝元長辰の二名である。

次に経世社については郵便報知新聞の明治一四年四月一六日付の告知欄に

経世社設立広告。本社の目的ハ専ら社会の改進を謀り時弊を矯正せんとするに在り。故に将来に企図する所の者、固より一にして足らすと雖も目下先つ著書、翻訳、講義、演説等の数項に従事し、余ハ着手の日を竢て更に広告する所あらんとす。仮本局、芝区三田二丁目二番地出版社第十七号、経世社。

という設立広告がみえる。社会の改進をはかり時弊の矯正をするためにとりあえず出版、演説などの活動をはじめるという。慶應義塾構内の慶應義塾出版社内に仮本局をおいている。第6表は経世社演説会についての一覧である。経世社演説会の開催はこの約半年の間に限られたようである。[9]

次に豈好同盟及び東洋議政会がある。豈好同盟は一四年七月二日に初めての演説会の記録があり、以後、一〇月まで会を重ねている。[10] そして第7表にあらわれるように人脈的にみればこの豈好同盟を発展させたかたちで一五年二月に東洋議政会が発足している。同月六日付の告知欄には

今般同志相謀り、人民政治上ノ思想ヲ誘発スルガ為メ議政会ナル者ヲ設ケ、専ラ府下ニ於テ演説、言論ニ従事シ兼テ各地ノ招聘ニ応ス。此段致広告候也。

とあって、犬養毅をはじめとして第7表の当該行にみる一五名の名を連ねた広告を掲載している。さらに同月一四日の雑報欄には

一昨十二日、明治会堂にて開かれたる議政会の発会演説ハ盛んなりし事にて、彼の三千余人を容るべき見積りにて建築せる大会堂も立錐の地なき程の聴衆にて、午後一時の開会なるに其頃は最早や聴衆充満して堂門を鎖せしに、外より押入らんとする衆人の勢にて扉を毀ちし位なりき。又堂中の右なる廻廊には招待席を設けて有名なる在野の諸紳士及び新聞記者居並バれ、弁士は代る〳〵壇上に立て得意の雄弁を振い、三千余人に超へたる聴衆なれども誠に静粛に

して唯議論微妙の佳境に入るときハ喝采拍手の声大堂を動かすばかりに鳴り響き誠に勇ましき事にてあり。

としてその盛況が伝えられている。周知のごとく明治一五年三月の立憲改進党の結成についてはこの東洋議政会も重要な構成要素となっているわけであるが、第7表にみるように議政会の活動は改進党の結党後も続けられている。

ところでここにみた四つのいずれも慶應義塾関係者による演説会について整理してみるとおよそ次の通りである。

①経世社と豈好同盟は前者が明治一四年四月、後者が同年七月に発足し、いずれも同年一〇月まで活動しており出発はやや異なるがほぼ同時に存在した結社である。第6表及び第7表にみるように両表にあらわれる山崎程者が豈好同盟から経世社に移ったと解釈すれば、両結社のメンバーは全く重ならない。

②豈好同盟は東洋議政会を経て立憲改進党へ連る組織である。

③明治政談演説会は経世社、豈好同盟に関わる人々の一部をも含めた慶應義塾系のより大きな組織である。

④それぞれの演説会で取りあげられた演題は多岐にわたるが会派による相違はあまりないようである。いずれも自由民権運動の昂揚期にあって専制政府攻撃を基調としている。その中で経世社の演説会は毎回、各演説者の弁論とは別に討論会を実施していたことが特徴的である。その討論の論題は次の通りである。

- 四月一六日、露国若し朝鮮を略取せんなとせは我国果して如何。
- 五月八日、自由得るの捷径は知力にあるか将た腕力にあるか。
- 五月二二日、同盟各国若し我条約改正拒まは我邦最後の手段如何。
- 六月一二日、外人に内地雑居を許すの利害。

○同月同日、方今我邦にて内治外政孰れか急なる。
○七月二三日、廃妾の利害。

福澤諭吉が三田演説館で行われた経世社員による学術演説会に客員として出席しているのも他の会派とやや異なるこうした経世社の性格を評価してのことかも知れない。

第8表～第11表はこれらの演説会に参加した精干社のメンバーとその演題についてまとめたものである。経世社に渡辺脩、高橋正信の二名、豈好同盟に池内源太郎、枝元長辰、坂井次永、波多野一、奥田直之助、梅木忠朴の六名が加わっている。豈好同盟のうち枝元、奥田、梅木の三名がさらに東洋議政会へも参加している。また明治政談演説会の演壇には渡辺のほかに枝元長辰が立っている。この他に高橋正信、盛与三郎、井出徳太郎も明治会堂で行われた明治政談の名を冠しない政談演説会に参加している。こうして精干社員の約半数の人々が学外におけるそれぞれの演説会活動に従っていたことになる。

これらの演説会での実際の演説の内容を伝える記録はあまり多くは残されていないが、精干社員関係についてはこれまでに次の二篇を確認することができた。

○渡辺脩「圧制政府ノ起ルハ敢テ偶然ニ非ラズ」（『日本大家演説軌範』第二巻所収、明治一五年刊。明治一四年五月八日・経世社演説会演説。）
○奥田直之助「転バヌ先ノ杖」（『名家演説集誌』第四号所収、明治一四年八月刊。明治一四年七月二日・豈好同盟演説会演説。）

渡辺は次のように述べている。「社会ノ最上権ハ其社会ヲ組成セル人民ニ属スル」ものであり、政府の職分は法律によりその人民の「権理・自由」を保護することにある。しかし現実にはその職分を誤って、「暴圧ノ極、

遂ニ国民ヲ塗炭ノ苦」におとし入れるような圧制政府が存在する。それは人民に「自治ノ精神乏シクシテ卑屈奴隷心アル」ことに原因があるのであって決して偶然の所産ではなく政府の罪でもない。「人民ハ主ニシテ政府ハ之ニ属従スルノ関係」にあるのであるから、人民は奮発努力して進取の気象を生み知識才能を発達させて自由政府を創出しなければならないと述べている。そして、「今ノ世ハ果シテ如何ナル時ナル歟」と結んでいるが、演説の中段では「今仮ニ（中略）東洋卑屈人民ノ上ニ共和政治ヲ施サハ好結果ヲ生スヘキトナス乎。余輩ハ信ズ。美果ヲ生セサル耳ナラス却テ害ヲ国内ニ波及スルニ至ルコトヲ。」と述べている。十四年五月の日本の状況をかなり深刻にとらえていることが窺えよう。

奥田の演説は国会即時開設論である。おおよそ世の中の事は転ばぬ先きの要心が肝要である。我国の現状は内政上では財政問題、外政上では条約改正、琉球論の紛議があって多事多難である。本年の世情は物価騰貴、国会論の沸騰もややおさまって落着いているかにみえる。それは集会条例の効果なのかは知らぬが、いずれにせよ「有ヲ消シテ無ニ帰スル」ことはできないはずで、ましてや「天賦ノ自由思想」を求める気運が消滅したわけではない。「今少シク平穏ナルガ如キ者ハ他日大ニ為ス所アランカ為」のことであって、とすれば、今、「転バヌ先ノ杖」は国会開設そのものであると述べている。

これらの演説会が行われた時から数年さかのぼることになるが、明治七～八年頃の朝野新聞にいわば文明開化期の諸事象の評判尽し、悪口尽しといった投書がさかんに掲載されている。そうした中に、「慶應義塾ノ書生論ハ丸デ先生ノ奴隷ノ様ダ」[11]とか「門前ノ小僧習ハヌ経ヲ読ム　三田カラ出ス投書」[12]といったものが見える。たしかに渡辺の論のごときは「愚民の上に苛き政府あり」と述べた『学問のすゝめ』初篇の論旨にそのまま通ずるといってよいだろう。しかしミルの言を引き、チャールス一世、ルイ一六世そしてアレキサンダー二世などの名を

連ねた弁舌は多くの聴衆に新鮮な響きを与えたものであろうことは想像に難くない。

(3)交詢社巡回演説会

第12表は交詢社に入社した精干社員の一覧である。交詢社は知識を交換し世務を諮詢することを目的として福澤諭吉の主唱によって結成された社交クラブである。その発会は明治一三(一八八〇)年一月のことであった。精干社員の約半数が創立時、あるいは創立直後に入社したことになる。「森田日誌」の明治一二年一一月二七日の記事に

奥田直之助氏室ニ入リ茶菓ヲ喫シ譚話ノ時、座側ニ新聞紙若キアリ。採テ之ヲ見レハ交詢社ミ員性(ママ)名広告ナリ。乃其人ヲ見ルニ官(ママ)員書生等ナリ。而シテ同社ミ則ヲ同氏ヨリ借リ受、而シテ渡辺ヲ尋子シ(ネ)ニ亦不在ナリ。乃チ復ル。時ニ七時ナリ。十時迄ドーカコーカ読書シ、先、英国史丈ケ預(ママ)見済タリ。十時ヨリ十一時迄交詢社ミ則ヲ見終リ、昨日ヨリノ日誌ヲ書シ而シテ夫ヨリ就床シ十二時ニ眠リ成ル。

とある。交詢社の創設過程に当時の慶應義塾生達が大いに関心を寄せていたであろうことがよく窺えるところである。広田輹平の入社が最も早く、森田勝之助が帰郷後しばらくしてからの入社で最も遅れている。森田を除いてほとんどが卒業の前後に入社手続をしたのであろう。職業、身分の記載に「英学者」あるいは「英学生」とあるのはそのためと思われる。

交詢社は創立の年明治一三年から一五年にかけて各地に巡回委員を派遣して演説会、討論会、懇親会を開催して啓蒙活動を展開し、また組織拡大につとめている。[13] 巡回委員の派遣は前後一二回に及んでいるが、その中には次のように精干社の渡辺脩や高橋正信の名がみえている。

○加賀・越中・若狭・近江巡回　明治14・10・5～11・9（須田辰次郎、高島小金治、渡辺脩）
○福島地方巡回　明治14・10・11～10・28（渡部久馬八、高橋正信、平賀敏）
○信越地方巡回　明治15・5・14～6・12（小幡篤次郎、渡辺脩）

この他にも交詢社には東京近県各地の演説会に演説者の派遣が要請されていた。主なものをあげれば次のような事例[14]がある。ここにも、池内、盛、渡辺という精干社員が名をつらねているのがわかる。

○栃木県足利　明治14・6・25～6・26（小幡篤次郎、池内源太郎、犬養毅）
○千葉　明治14・10（井上貫一、盛与三郎、岡崎亀雄）
○取手　明治14・12・27（渡辺脩、北川礼弼）

時あたかも北海道開拓使官有物払い下げの問題をめぐり世論が沸騰し、またいわゆる一四年の政変が起った時でもあった。先にみたさまざまな演説会とともに学窓を出たばかりの青年達に多くの活躍の場が用意されていたのである。

明治一四年九月三〇日の郵便報知新聞の雑報欄に次の記事がある。

東京の弁士渡辺久馬八、平賀敏、高橋正信の三氏ハ茨城県の有志輩が招聘に応じ、去る十四日東京を発足し取手駅、守谷町、矢作村、夫より水海道町、下妻町、平塚村等の諸所に於て政談或ハ学術の演説をなせしに聴衆ハ少なきも二三百に下らず。多きハ七八百にて土地柄にハ似ず頗る盛んなりし。是ハ畢竟、衆人が開拓使処分の結局如何に注目欹耳するに因るものにて、到る所其不正不当を咎めざるハなく、有志者ハ勿論無智の小民までも切歯して三氏に就き、後来の処置如何を質問する者続々来りて日々寸閑を与へざる程なり。演説会も予約の外、猶ほ数ヶ所より招待ありしかども、同行中微恙に罹りし者あるを以て辞し、去る廿六日に帰京されしとの報あり。

記事のかぎりでは断定できないがおそらくは交詢社関係かと思われる茨城県取手近辺で行われた演説会の実際

を伝えるもので、ここにも精干社員高橋正信の名がみえる。また明治一四年の政変に関する福澤諭吉の秘録「明治辛巳紀事」[15]の一節には次のように記されている。

開拓使の一條起りてより、世上血気の少年は発狂の如くなりて喋々之を論じ、其逆上の体は誠に笑ふ可き様なれども、人心の勢は留む可らず。慶應義塾の少年輩も、平生は諭吉の最も注意する所にして、何事に就ても先づ黙せよ〳〵とて、到底世間の何社何会とは水際の立つ程に区別せんことを念じたれども、開拓使の一條に至ては何とも制御に難くして留む可らず。（中略）又これに加るに本塾寄宿の鹿児島生徒枝元阪元などが、黒田へ手紙を贈り川村へ談じたることもありし由。成程黒田も川村も定めて立腹したることならん。

おそらくは官有物払い下げの不当なることを開拓使長官黒田らへ直接に訴える内容の手紙を書いたのである。枝元とは精干社員枝元長辰であろう。

明治一〇年代前半期はこの官有物払い下げ事件をめぐる論議を含んで自由民権運動の昂揚期であった。慶應義塾の内外に政府批判のうねりが高まり、それはいたずらに過激な議論をきらった福澤を当惑させる状況でもあったが、精干社のメンバーのうちにもそうした師の心配をつのらせる者があったのである。

(1) 前掲「三田演説日記」による。
(2) 「野堂自伝」四〇ページ
(3) 「慶應義塾百年史・上」六八二～六ページ
(4) 「慶應義塾百年史・上」六八五ページ
(5) 「郵便報知新聞」については大洋写真工芸社制作のマイクロフィルム（慶應義塾図書館所蔵）による。引用については適宜句読点を施した。漢字及び仮名の字体については現行常用のものとし、振り仮名についてはこれを省略した。（以下同じ。注記を省く。）
(6) 三田演説会関係の郵便報知新聞記事については、松崎「初期三田演説会資料」（前掲）による。
(7) 復刻版「朝野新聞」（ぺりかん社刊。）
(8) 東京大学法学部・明治新聞雑誌文庫所蔵

(9) 第6表に注記したように経世社員について「郵便報知新聞」と「平賀敏君伝」の伝えるところには若干の相違がある。
(10) 第7表に注記したように豈好同盟員について「郵便報知新聞」と篠田鉱造「明治百話」の伝えるところには若干の相違がある。
(11) 「朝野新聞」明治八年一一月五日
(12) 「朝野新聞」明治八年一一月一九日
(13) 「交詢社百年史」一三五～一四〇ページ
(14) 「交詢社百年史」一四〇ページ
(15) 「福澤諭吉全集」(以下、「全集」と略す。)第二〇巻、二三八～九ページ

四　精干社人物誌

第13表は明治二三(一八九〇)年、二九年、三三年、四四年各年度版の「慶應義塾塾員名簿」[1](以下、「塾員名簿」と略す)により、精干社員一九名に奥田、蜂須賀を加えた計二一名の卒業後の消息について塾員名簿の記載をやや簡略化してまとめたものである。名簿の記事に必ずしも統一性がないのであるが全体の約三分の二についての住所と職業のあらましを知ることができる。明治二三年の時点ではそのうちの半数にあたる七名が出身地を居所としているが、その後の移動もかなりみられる。職業についてはまず教員と新聞関係、次いで議員、郵便局長など政官界へ関わった者が多いといってよいだろう。

ここでこれまで取りあげた資料以外にも若干の情報を求めることができる人々の経歴その他についてまとめておきたい。渡辺脩、池内源太郎については「慶應義塾塾員履歴集」(明治二七年刊、以下「履歴」)に記事がある。渡辺、及び黒川正、豊嶋(茂岡)満俊については「慶應義塾名流列伝」(明治四二年刊、以下「列伝」)に経歴等の記事がある。これらの人々については両資料により慶應入学以前を含めてやや詳しい経歴を追うことができる。また福澤諭吉

の残した書翰（以下「福澤書翰」）により前記の渡辺をはじめとしてかなり多くの人々について、それぞれのとくに卒業後の経歴等を知ることができる。

以下各人の入学の順に従ってその経歴等についてみてみよう。

〈高島鉱橘〉

高島は明治九（一八七六）年三月、一二歳九か月という若年で慶應義塾に入学した。七年六月には兄小金治がやはり一二歳二か月という年齢で入学している。鉱橘は一三年一期までの在学を確認できるが以後の動静が詳かでない。ただ明治二五（一八九二）年一〇月八日付の清岡邦之助宛の福澤書翰[2]がありその末尾に次のように記されている。

高島小金次（治）の実弟高島鉱吉（橘）はシカゴ博覧会の鳳凰堂を作るため土木会社より渡米、来年まで同地在留なり。御通行の節は御尋可被成、多少の便利可有之存候。

当時、英国滞在の清岡邦之助に福澤周辺の近況を伝え、また翌年の帰国に際して米国廻りのコースを取ってシカゴ博覧会の一見を勧めた書翰中の末尾の記事である。高島鉱橘が土木会社（社名未詳）より派遣されて滞米中であることがわかる資料である。

〈梅木忠朴〉

梅木の経歴や人物像などについては四国女子大教授新垣宏一氏の研究[3]に詳しい。ここではまず新垣氏の収集された諸資料[4]のうち梅木の自筆と思われる履歴書を以下に引用したい。

松山市大字玉川町拾五番戸梅木忠朴
愛媛県士族旧松山藩
安政五年五月六日伊予国温泉郡円蔵寺町生

学歴

自明治三年一月
至同六年十二月　松山藩校及養生舎ニ入リ漢学及普通学ヲ修ム
自明治七年一月
至同八年二月　斎院敬和塾ニテ漢学専修
自明治八年三月
至同十年九月　松山中学校ニテ英漢数三学科ヲ修
明治十年十一月　東京三田慶應義塾ニ入学
明治十四年七月　慶應義塾本科卒業
自明治十四年十月
至同十六年十二月　東京神田法律専修学校及鳩山和夫氏ノ自宅ニテ法律学ヲ修ム
自明治十七年十月
至同二十年十二月　神戸小野浜造船所雇英人クラークニ就キ英語ヲ修ム
自明治二十年一月
至同二十六年十二月　神戸モアー学院及英人ベケンヘッド、タムソン等ニ就キ英語ヲ修ム

職歴

自明治十四年一月
至同十五年九月　東京郵便報知社ニ入ル
自明治十五年二月
至同十七年九月　神戸居留地英国伝道学校乾行義塾英教員嘱托(託)
自明治廿年三月
至同廿三年十二月　神戸三井銀行支店英語夜学校教員嘱托(託)
自明治廿四年二月
至同廿七年五月　神戸大東館夜学校英語教員嘱托(託)
明治廿七年五月　愛媛県尋常中学校助教諭(注)ヲ命ス　愛媛県
同年同月十五日　月俸二十五円給与　愛媛県(ママ)　愛媛県

同 廿九 年 四 月十三日　舎監心得ヲ免ス　愛媛県
明治三十一年十月廿二日　愛媛県尋常中学校教諭心得ヲ命ス　仝
仝年月日　月俸三拾円下賜　仝
明治卅三年十二月廿一日　月俸三拾五円下賜　仝
明治三十五年三月卅一日　兼舎監心得ヲ命ス　月加俸三円給与　仝
（仝三十、カ）□七年一月七日（舎監、脱カ）　依願職務ヲ免ス（自己便宜）　仝
〔注〕傍書、「心得兼務、月手当　壱ヶ月弐円給与」

梅木は愛媛県松山中学を経て慶應義塾に入学し、明治一四年七月に義塾を卒業した。同年九月に郵便報知新聞社に入り、さらに一〇月より一六年一二月まで神田法律専修学校（現、専修大学）及び鳩山和夫の下で法律学を学んだ。その後神戸に移住しクラーク他の英人について英語を学ぶとともに相次いで三つの学校の教壇にも立っている。ここでやや疑問が残るのは法律専修学校時代の後半と神戸の乾行義塾時代の前半の約二年近い期間が重なっていることである。また先の第7表にみるように梅木は一四年から一五年四月頃までの「豈好同盟」や「東洋議政会」による演説会に計四回ほど出席して演説をしている事実がある。当時の交通事情からすると東京・神戸間を頻繁に往来していたとは考えにくく、法律専修学校時代の後半は在籍していたことのみを記していて実際には通学していなかったのではないかと考えられるがこの点についてはなお後考を待たねばならない。

明治二七（一八九四）年五月からは郷里の松山へ帰り、県立尋常中学校に奉職している。本校は明治三二年には県立松山中学校と改称している。また本校は制度的にはそれぞれ別個の学校であるが明治八年藩校明教館跡に開設され同一九年まで存続した県立松山中学校、同二一年に開設され、二五年まで存続した私立尋常中学校の歴史

を継承した学校である。[5] 梅木は母校に帰ったといってよいだろう。また本校に夏目漱石が在籍したのは明治二八年から二九年にかけてのことであった。梅木は同じ英語科教師として漱石と席を並べたことになる。

明治三七年一月松山中学校教師としての一〇年を経て梅木は「自己便宜」により退職をした。その後、再び神戸に移り、ここでも兵庫高等小学校や市立兵庫実業補習学校[6]に英語教員として勤務しまた貿易商長田大介商店において英文実務に携った。昭和一〇（一九三五）年三月一四日、七八歳の天寿を全うしている。

ところで、梅木は漱石の「坊ちゃん」に登場する「うらなり」こと古賀先生のモデルと目される人物である。もちろんモデルはあくまでもモデルであってうらなりがそのまま梅木ではないが、気の弱いしかしまた坊ちゃんの目からは比較的好意をもって見られたうらなりに投影された梅木の人物像について新垣氏は興味深い分析をされている。

それは慶應卒業後の梅木は本来東京にとどまり先輩である尾崎行雄や犬養毅のあとに続き、また大隈重信について政官界に雄飛することを望んでいたのではないかと推定されること、しかしいわゆる明治一四年の政変による大隈の下野とともにその輩下にあった多くの慶應出身の俊秀たちが官界を離れたことを契機として将来への展望を失い、やがて初志を断念して神戸あるいは郷里へ引籠ることになったのであろうということである。新垣氏は、

> 梅木の場合、わずかに尾崎、犬養よりおくれており、準備未熟であった。身命をかけて政治闘争にとびこむ覚悟、力量、見通しについて悩むところがあった。それよりも、青年の清純な正義心を絶望させる政治の現実に、いや気がさしたのではないか。かれの性格には、時に激しいものがあったが、やりきれずに逃げ出す気弱さもあった。後に松山で酒によって破滅する。それもこの気弱さがもたらしたものであろう。

と述べられている。[7]

確かに、先の第10表や第11表にみるように「革命の性格」「輿論は公共心を須って勢力あり」「世惑弁論」「国家の憂」といった演題を掲げて豈好同盟や東洋議政会の壇上にたっていたこと、また明治二二年に暴漢に襲われ重傷を負った大隈に見舞状を送っている事実[8]のあることなどは梅木の政治の世界への関心がきわめて高かったことを示すものであろう。また梅木は松山へ帰るまでの神戸時代に結婚し四人の男子を儲けているがその子供たちに憲一郎（明治二二年二月一二日生）、祭二郎（二三年三月二一日生）、政治郎（二五年一月二四日生）、馨（二七年五月一七日生）と名付けている。[9] ここにも帝国憲法発布や帝国議会開設などを寿いでそれに因んで命名したということ以上に政治への複雑な感懐があったことが窺われるのである。

松山出身の哲学者安部能成がその著「我が生ひ立ち」の中で中学時代を回想して次のように述べている。[10]

英読の先生は梅木忠朴といって、顔の大きな色の青い先生で、漱石の「坊ちゃん」のうらなりは、この先生から思いついたのぢゃないかと思はれるくらゐ、ふだんは元気がないのに、慶應義塾の出身で、教授中話が一度義塾のことになると、急に元気が出て談論風発の概があった。噂によると犬養だとか尾崎だとかの、塾での後輩だったらしく、在学当時は大分将来を嘱望された人物だったといふが、その英読といふのが実に日本的朗読であって、ナショナル第一リーダーの一番初の、It is a dog といふ文章を、首席から末席まで四十人くらゐの生徒に一々読ますといふ、実に退屈極まるものだったが、塾の話の時には、人が変ったやうに急に熱が加はって、しかも雄弁になった。かういふのが月に一二度あった。或る慶應の先生は眼光炯々として居て、その先生が睨みつけると鼠が縮み上って死んだ、だから先生の家では鼠取は入らなかったといふやうな話も出た。この人は酒は中々いける口で、貧乏暮らしの中にも、晩酌は盛んにやられたらしい。

ふだんは退屈極まる授業だったがひとたび慶應時代の回想に話が及ぶと犬養や尾崎の名も出て談論風発の趣が

あったという。志を遂げられなかった屈折した思いがそこにはあったと思われるのである。

〈広田輹平〉

広田は安政二（一八五五）年五月に生れた。第2表にみるように明治一一年二月に慶應義塾に入学し同一二年二期までの在学を確認できるが、次の福澤書翰一通が帰郷を控えた広田の動静を伝えている。(11)

神戸の飯田出府に付、其代人の事如何と存居候処、幸なる哉本塾生広田輹平と申者、此度帰国、其国は淡路国、人物は壮年なれ共、嘗て戸長杯勤候事有之、随分世事に慣れ、牛場も兼て知る人に御座候。旁以唯今同人へ添書を附し、甲斐に面会、牛場へ相談、都合よくば其儘神戸に留置様申遣候。此段御含まで申上置候。早々頓首。

十二月十六日　福澤

小幡様

神戸商業講習所の教師飯田平作の後任として広田輹平を推薦したことを知らせる書状である。同校はその運営を慶應義塾が引受けることにより明治一〇年一月に開講した。校長甲斐織衛その他が義塾より派遣されていた。当時兵庫県勧業課長であった牛場卓蔵、校長甲斐、そして小幡篤次郎へと関西在住の義塾関係者それぞれに配慮を依頼しているわけで塾生への福澤の細かな神経の使い方がよくわかる書状である。なお福澤全集ではこの書翰の発信年を明治一三、一四年頃かとしているが、一二年である可能性が高いように思われる。

〈高橋正信〉

高橋は安政四（一八五七）年九月に生れた。明治一一年二月に慶應義塾に入学、同一三年一二月に卒業した。渡

辺や池内と同様に在学時より演説活動に力を入れていた。卒業後しばらくして横浜正金銀行に職を得て晩年まで過したと思われるが、正金銀行以前の高橋について「福澤書翰」により若干の動向をみることができる。一つは明治一四年九月一三日付小幡篤次郎宛の書翰[12]で「渡部久馬八、高橋正信、平賀敏の三名、今朝出立、千葉県、水戸の近傍へ演説出張の積、其御地相替義も無之哉、ヨングメンは御報知次第何時にても出張可致、無事に苦しみ居候。」とある。交詢社関係の演説会かと思われるが、大阪滞在中の小幡にあてて高橋ほかの活動を報告しているものである。また明治一六年七月一九日付で滞米中の福澤一太郎と捨次郎にあてた近況報告の書翰[13]中には「高橋正信は一週間前朝鮮より帰り、井上は久しく居残り候。朝鮮より生徒十七名、六月中に来り、尚過日十二名、尚高橋の帰る節にも両三名、昨今は非常の多人数なり。」とあって、この頃、朝鮮の改革派金玉均、朴永孝らの要請で朝鮮政府の顧問として福澤の推挙した牛場卓蔵・井上角五郎に随行した高橋の動向を伝えている。学窓を出たばかりの高橋が師福澤の指示によって多様な体験を重ねていたことが窺われるところである。

〈井出徳太郎〉

井出は安政五（一八五八）年七月に生れた。明治一一年一〇月、慶應義塾に入学、同一三年一月に卒業している。卒業後の井出については第13表にみるように宮崎県の日州新聞社から交詢社役員へという経歴を追うことができる。明治三三年の塾員名簿に「井出徳三郎・日本紳士録編纂事務所」とあるのも徳太郎のことと思われる。この間、井出は交詢雑誌を中心に多くの訳書・論説を発表している。[14] また発信年未詳であるが木暮篤太郎宛の次のような福澤書翰[15]が井出の動静を伝えている。

梅雨未晴益御清適奉賀。陳ば過日洋学教師の儀仰遣、其節さし向是れと申人物も無之候処、昨今に至り井出徳太郎事

地方より帰り目今閑散なり。此生なれば原書は十分に出来可申、尤其御地にても初て御着手の儀、給料等もさまで御心配には及申間布、入湯旁遊行の序、暫時逗留と申位にて可然哉に存候。唯一書生の事ゆへ何も無之、衣食とポッケトモニと旅費丈けあれば、其後の相談出来可申存候。御地の御都合如何哉相伺度、態と一書を呈し書。早々頓首。

六月廿六日　　諭吉

木暮篤太郎[16]（武太夫）は万延元年（一八六〇）年生れで、明治一一年三月に慶應義塾へ入学した。福澤諭吉の助言により群馬県伊香保町ではじめ家業である温泉宿の経営に専心し、のち明治二一年には群馬県会に選出されまた同二三年には第一回衆議院議員に当選、それ以来四三年までに前後七回に及ぶ当選を果した人物である。この木暮からの要請で洋学教師の派遣を要請された福澤が井出を紹介したものである。文意からすると井出が日州新聞を辞した頃のことであって、従って第13表の経歴表からすれば明治二四年から二九年までのいずれかの時点のこととなる。この紹介の結果がどのようになったのかいまのところ詳かではない。

〈黒川正〉

黒川は安政三（一八五六）年三月、関宿藩家老木村庄右衛の長男木村庄太郎として、江戸新堀に生れた[17]。戊辰の年の混乱に一家離散し父子共に官軍の眼を逃れるため、それぞれ山田大夢、黒川正と姓名を改めたという。大夢は後年静岡師範学校長になった。正は一時横浜の一豪商に身を寄せていたが、やがて沼津に赴き沼津兵学校に学びとくに数学に専念した。同校の助教に任ぜられたが視力に障害を生じ測天量地の術に不適であることを覚り英学に転じた。静岡師範学校長江原素六の知遇を受け明治八年一一月、同校教員となり英語を担当した。一一年二月、平賀敏とともに県費留学生に選ばれ上京し箕作秋坪の三叉塾に入り、一二年一月慶應義塾に転じ翌年四月に

卒業した。この年の九月、県立掛川中学の創立にあたり訓導兼幹事となった。黒川より同校奉職の報告を受けた福澤が折返し返信を認めているがその内容は次の通りである。[18]

去月二十二日の貴書拝見。時下秋冷深相成候処益御清安奉賀。随て老生無事、幸に御放念可被下候。御帰郷の後は掛川中学へ御奉職の由、御多忙の御事奉察。折角御勉強所祈に候。当地相替義も無之、塾も依旧読書いたし居候。演説講義は次第に盛なる様子なり。此段拝復まで早々如斯に御座候。頓首。

十一月二日　　福澤諭吉

黒川正君机下

寒温不順御自重専一奉存候。

この書翰について福澤全集では発信年を明治一四、五年頃かとしているが明治一三年とみるべきであろう。

この後、黒川は明治一七年八月には浜松中学校に転じ、さらに一九年七月には浜松、静岡、韮山の三中学校を合併した静岡尋常中学校の教諭となった。二九年三月、同校を辞して上京し中央幼年学校教官となった。「塾員名簿」によった第13表に陸軍教授とあるのはこのことを指すものと思われる。「列伝」によればここでの黒川を次のように評している。

明治廿九年八月より四十一年一月に至る迄、陸軍士官学校の英語教官として、外国より招聘せる教授と比肩し些の遜色を見るなく、而も他の富貴栄達を希はず、孜々として青年士官の教養に勉めたり。左れば氏の薫陶を受けたる軍人甚多くして、卅七八年戦役の際には殊勲を樹てゝ戦歿したるもの多く、氏は其訃音に接する毎に感慨実に無量なるものありきと云ふ。

士官学校に教鞭をとるかたわら、黒川は成城中学、国民英学等においても教壇に立った。さらに四二年には名古屋市に移り私立名古屋中学及びキリスト教関係の学校に勤めた。大正五（一九一六）年三月、英学教師としての

生涯を終えた。

〈豊嶋満俊（改姓浅岡）〉

文久元（一八六一）年一一月、松山藩豊嶋節之進の二男として生れた。その後、浅岡氏の養子となり改姓している。藩学明教館に学び、また藩の碩儒大原観山について漢籍を学んだ。松山中学卒業後、明治一二年一月慶應義塾に入り一三年一〇月まで在学したが造船のことを志し退学した。その間の事情について「列伝」は次のように伝えている。

卒業の間際に至り、氏一日以為我国は四面環海の国なり、外国との交通頻繁となるに連れ、通商航海の発達に沿海の防備に将来は英国の如く国を守るにも、亦富ますにも、必ずや海上に拠らざるべからず。随て造船は後来男児の身を委すべき職業なりと深く心に決する所あり。然れども当時別に工業上の智識ありしにあらず。又工業に関する書籍を読みたる事もなかりしが一度意を決して後は「ダーウェン」や「ミル」を読むの気なし、氏仍て之を福澤先生に諮りたるに、直に賛成を得即刻塾を退学し、先生の多大なる厚意によりて、故肥田浜五郎氏、及び故川村伯に面会し、又肥田氏の紹介に依りて当時の横須賀造船所次長渡辺忻三氏に面会し、玆に造船所の無給職工となり、初めて造船の実地に従事する事とはなり。

一度意を決して後は「ダーウェン」や「ミル」を読むの気なしという徹底した方向転換であった。師福澤も側面からの援助をしており、明治一六年五月海軍卿川村純義にあてた次のような紹介状[19]が残されている。なおこの紹介状の文意からすれば先に引用した「列伝」で、豊嶋の川村への面会を退学直後のこととしているのは誤りであろう。

不順の時候に御坐候益御清適被成御座奉賀。陳ば此生は浅岡満俊と申、旧宇和島〔松山〕藩士、少年の時より弊塾寄宿、洋書

も相応に読み、兼て器械学執心に付、先年或人に依頼、横須賀にさし遣し、造船の製図稍や出来候よしにて、昨年より御省造船課に出仕被仰付、今に奉職罷在候。至て順良なる性質にて、拙宅へは常に出入、今日も来訪の序に、何卒海軍卿へ一度御目通り仕度、就ては其為添書認呉候様にとの依頼、御支配の義、特に添書も異なものに候得共、何分にも突然推参は憚多しとの事に付、則其意に任せ前段申進候次第、若し御都合も宜布候はゞ暫時間御逢被成遣候様奉願候。い才は本人より可申上、御聞取奉願候。頓首。

五月廿二日　　諭吉

川村先生梧下

横須賀造船所の無給職工として二年を過し明治一五年一一月には海軍省主船局に出仕した。翌一六年、軍艦注文のため渡英する宮原大機関士に随行し滞英八年に及んだ。グリニッチ海軍大学に二年間在学ののち二四年帰国し横須賀造船所勤務を命ぜられた。以後海軍の造船関係の職務を歴任した。四〇年一月には舞鶴海軍工廠、四一年四月には佐世保海軍工廠に転じて海軍造船大監となっている。

〈枝元長辰〉

文久元（一八六一）年一一月鹿児島県姶羅郡加治木に生れた。[20] 幼少より神童といわれ、長じて藩校造士館に入った。明治八年上京し共慣義塾、次いで慶應義塾に学んだ。一三年七月、義塾卒業ののち郵便報知新聞に入り、一七年八月改進新聞、そののち都新聞に記者となり、さらに報知新聞に転じた。日清戦争に報知通信員として旅順に赴き活動中に病を得て帰国し療養につとめたが明治二九（一八九六）年一月に歿した。

〈池内源太郎〉

池内は安政五（一八五八）年四月、宮崎県延岡に生れた。藩校広業館に漢書を学び、広業館が廃されてのちもその後身である延陵中学（さらに亮天社と改称される）に引続き在学して洋学、漢書、数学を学んでいる。明治九年一一月、中津市学校に移り専ら洋書を学んだ。西南戦争により一旦帰郷したが一二年五月に再度帰郷するまで在学。同年九月、慶應義塾に入学、一三年一二月に卒業した。卒業の前後において演説会活動に従ったことはすでにみた通りであるが、この間の事情について「履歴」は次のように記している。

塾窓に読書し傍ら官の翻訳をなし、或は本塾演説館に於て公衆に対し定期の演説をなし、機に臨んでは総州地方有志者の聘に応じ該地方演説会に赴き有志者と談を交へたり。或は学友と謀り豈好同盟会を起して明治会堂に政談演説を試み大に世弊を矯めんことを勉めたり。

明治一四年七月、三菱会社入社。一五年六月横浜の三菱会社支店に転じ、一六年四月には病を得て退社した。同年五月帰郷、健康を回復して母校亮天社に入り英書教授として七年を過した。二〇年一一月延岡第百四十五国立銀行株主総代人、二五年一月延岡米社調査委員、二六年五月延岡岡富村本小路上組衛生委員にそれぞれ当選した。「履歴」の記事はここまでであるが第13表にみるように池内はおそらく終生を郷里に過したことと思われる。

〈渡辺脩〉

渡辺は安政六（一八五九）年一二月、愛媛県北宇和郡岩谷村に生れた。生家については「列伝」によれば「世々邑の里正たり」とある。明治七年より一〇年まで宇和島学校に学び、一一年二月より一二年七月にかけては豊前中津市学校に英学を学んだ。福澤及び慶應義塾の支援を受けたこの学校への入学が先きにみた池内源太郎と同様

にさらに慶應義塾へ進む契機となったと思われる。池内は中津市学校に明治九年より一二年まで在学しており精干社の二人のメンバーが市学校以来の同窓生であったことになる。渡辺は明治一三年一〇月、慶應義塾に入学し同一四年四月に卒業した。また交詢社の創立と同時に入社し、さらに経世社を組織して、積極的に演説会活動に関わったことはすでにみた通りである。また、福澤諭吉の推挙により物価新報（のちの中外商業新報）の記者となったが明治一五年一〇月には農商務省御用掛となり、以後、官界を進むこととなる。一七年七月、外務省御用掛。一九年六月、副領事として朝鮮国元山に勤務、二二年五月に帰朝した。同年九月、特許局審判官となり、二三年三月には逓信大臣後藤象二郎の下で逓信省書記官となった。二四年三月には長崎郵便電信局長、二八年には臨時台湾電信建設部事務官を兼任、さらに愛媛県書記官となっている。この頃の渡辺にあてた福澤書翰二通が残されている。

一通は明治二四年五月二二日付[21]のものである。おそらくは渡辺より福澤に対して長崎郵便電信局長着任の挨拶と着任早々に来日中のロシア皇太子が警備の警官に斬りつけられ負傷するといういわゆる大津事件が起り電信・郵便業務に多忙をきわめていることの報告がなされたものと思われ、それへの見舞いをかねた返書となっている。あわせて福澤と家族の近況を伝え、追て書には「尚以近年は攘夷論の再生、露公使館に対する嫌疑者も二十人計りの拘引中のよし。明治十四、五年来政府の注意教育風の結果ならんか、笑止千万の事に御座候。」というコメントも添えられた興味深い書状である。

他の一通は明治二九年四月一七日付[22]で、在京中の渡辺に対して福澤宅への来訪をもとめ、拓殖務省南部局長野村政明（旧名市来七之助、鹿児島県出身、明治一一年一月慶應義塾入塾[23]）とともに会食しようという誘いである。「食事いたしながら南島談も亦面白からんと存候。何卒御繰合御来駕奉願候。」と記されている。それぞれに多忙な師弟

三人が時間を繰合せての会合である。何が話題となったのであろうか。

渡辺は明治三三年一〇月には愛媛県書記官より転じて香川県書記官となった。三四年四月退官。退官後は立憲政友会に所属して愛媛県郡部より推されて衆議院議員たること前後四回に及んだ。三五年八月には佐世保市長となり三九年四月まで在職、市長辞職後は実業界に転じて大阪電灯株式会社常務取締役、三品取引所理事、大阪電球会社取締役、松山電気軌道会社取締役などを歴任した。「列伝」は渡辺の人物を

人となり明慧果決、洒落にして而も熱誠、特に弁舌爽やか也。卅五年八月の総選挙には毫厘の運動費を抛つことなく連日連夜演説を以て其主張を披歴し、遂によく大名候補者たる伊達武四郎氏に対抗して衆議除議員に当議し、又同年従来格別の関係なき佐世保市長に推されしもの、固より此性行に起因せずんばあらず。氏の性行は事務に適し、統率に適し、又公議に適す。氏の如きは多才多器の人なりと称すべき哉。

と評している。

〈森田勝之助〉

和歌山県伊都郡妙寺町出身の森田勝之助は文久二（一八六二）年九月に生れた。[24] 慶應義塾入退学の時日は確定できない。入学時日については慶應義塾入学者の名簿である「入社帳」に記録がなく不明であるが、明治一二年第一期（一月～四月）の「学業勤惰表」に初めてその名を見ることができる。そして同一五年第一期の「学業勤惰表」に「本科・第二等」在籍という最終の記録を残している。おそらくこの直後に帰郷したと思われる。いわゆる卒業はしなかったのであるが明治二三年には「特選塾員」として慶應義塾卒業生としての待遇を受けるようになっている。これは帰郷の後に森田庄兵衛を名乗り家業である酒造業の経営にたずさわるかたわら、和歌山県下

の産業・文化の近代化に関わる多方面の事業をおこした業績を評価されたことによるものと思われる。

すなわち明治一五年には有志と共に妙寺町に伊都自助私学校を興している。これはこの年に設立されていた自助社を経営母体とするものであった。自助社はその仮規則第一条に「本社ハ有志相集リ、文学ヲ研究シ、世務ヲ諮詢シ、知識ヲ煥発シ、情交ヲ厚クスルヲ以テ目的トス」とあって交詢社設立の影響を受けたものであることは疑いない。自助社創立時に森田は在京中であったかと思われるが何らかの役割を果したのであろうことが考えられる。

明治二〇年には紀陽新聞を和歌山市元寺町に発刊、同二九年には妙寺町に伊都銀行を創設して頭取となっている。また三〇年までに紀和鉄道及び南和鉄道両社の取締となっていたが、三一年一月の両社の合併後も引続き取締役となり、また同じく三一年には和歌山市に南海絹糸紡織を創立、さらに三二年には和歌山県農工銀行取締役に就任、四四年には紀南共同汽船を創設している。また大正六年には妙寺製糸監査役、新和歌浦土地株式会社々長に就任、この間、明治四四年六月には多額納税者として和歌山県選出の貴族院議員となっている。明治四四年四月調査の「和歌山県貴族院多額納税者議員互選人名簿」によれば森田庄兵衛の直接国税総納額は二八九六円八七銭で互選人一五人中の第七位に位置する税額であった。大正一三（一九二四）年一一月に歿している。

〈奥田直之助〉

奥田は明治一一（一八七八）年六月に慶應義塾へ入学している。一四年七月に卒業後ほどなく帰郷したようである。第13表にみるように郷里での県会議員奥田の跡を追うことができるが、明治一四年一〇月一九日の「朝野新聞」[25]に次のような記事がある。

鹿児島県士族ハ尽く今の政府党にして官権主義の者計りと思ひしに、該県には元来城下士族、城外士族の名義ありて二派に分れ城外士族ハ民権党にて自主自由を主張すれ共、是までハ城下士族に圧せられ遺憾ながらに打ち過ぎしが、此二三年城外派が頭をもたげかゝり其中柏田盛文、奥田直之助の両氏ハ以前慶應義塾にて勉励せし者にて、疾くより独立の見識を立て其の説を拡張し城下士族の如く因循説に雷同して西に向けといへば西に向き、東へ歩行けといへば東へ歩行く如き気質にあらねバ、追々民権の進歩するを喜び今日こそは我々の望みを達する時来たれりと同志を励まし、今ハ却って城下士族を圧倒する程に至れりと。今度の勅諭を拝承せバ皆祝賀の声を揚げ雀躍するハ面のあたり見るが如しと或人よりの投書。

柏田盛文とともに県内民権派士族の糾合に力を尽したという。これは明治一四年末から一五年にかけて県下の官権派である郷友会に対抗して農事社、自治社、公友会の民権派三団体を合同して九州改進党鹿児島部が結成されようとしている情勢[26]を投書掲載のかたちで伝えるものである。奥田はこの後も明治二二年三月に誕生した鹿児島同志会の中心となるなど地方政界の一方の雄として引き続き活動を展開したようである[27]。

なお柏田盛文[28]は嘉永四（一八五一）年三月生れで慶應義塾入学は明治七年九月である。明治一三年三月、鹿児島県会議員に当選し直ちに副議長となり一六年には議長となっている。この間、一三年には県下有志三五〇〇余人の総代として国会開設請願のために上京している。そして東洋自由新聞の創刊に参画し一四年には自由党の組織に参加してその成立とともに幹事となっている。一五年三月帰郷、県下有志と自治社を組織しようとしたが同志と議合わず自由党を脱党、のち明治二二年に第四高等学校長となった。二五年に衆議院議員となったほか諸県知事、文部次官等を勤め明治三六年新潟県知事で休職、明治四三（一九一〇）年六月に歿している。

以上、四節にわたって精干社とそのメンバーについての概要をみた。

精干社は明治一〇年代前半の慶應義塾内に組織された塾生による演説グループの一つであった。そのメンバーは塾生としては上級クラスに所属し、出自としては四国地方を中心に西日本の士族層の人々が過半を占めていた。折からの自由民権運動昂揚期にあって、彼等のうちには自らのグループ活動のみでなく、三田演説会をはじめとする慶應義塾内外のさまざまな演説会組織にも関わって弁論の機会をもつ者も多かった。

演題及び二三の演説記録からみれば、それらの論調は専制政府攻撃を基調とし日本の近代社会構築の道を模索するものであったと思われる。やがて、彼等は主として教育、新聞、政官界へと進出し、中央あるいはそれぞれの出身地方において相応の指導的位置を占めるにいたる。今後なおこれらの人々のライフヒストリーと演説会の実態に関する資料を収集し、明治初期における知的エリートたちの果した歴史的役割についてさらに検討する機会をもちたいと思う。

(1) 慶應義塾福澤研究センター所蔵
(2) 「全集」第一八巻、五三八ページ
(3) 新開宏樹（新垣宏一）「坊ちゃん――阿波のモデルたち――①～⑤」（「徳島新聞」昭和四七年一一月九日～四八年一一月二三日）新垣氏より全編のコピーを御恵与いただいたことを付記してお礼を申し上げます。
(4) 新垣氏より梅木の履歴書、梅木一族の戸籍等について直接の御教示をえた。
(5) 永江為政編「四十年前の恩師草間先生」参照
(6) 第13表参照
(7) 新開宏樹、前掲、第二六回（「徳島新聞」昭和四八年六月七日）
(8) 注(7)
(9) 注(7)。梅木一族戸籍(注4)
(10) 安部能成「我が生ひ立ち」一八八ページ
(11) 「全集」第一七巻、四三〇ページ

(12) 「全集」第一七巻、四六三ページ
(13) 「全集」第一七巻、五六五ページ
(14) 「福澤諭吉とその門下書誌」によれば次のような訳書、論説がある。ジョン・ラボック著「族制変遷論（訳）」（交詢雑誌199号～209号）「万国実況集彙　移住論」（交詢雑誌211号～244号）「万国実況集彙　万国労働者の優劣」（交詢雑誌258号～274号）「統計の用法」（交詢雑誌264号）「民間に新事業の起らざるは少壮者の品行修まらざるにあり」（交詢雑誌290号）ジョン・ルボック著「開花起源史（訳）」（博聞社刊。明治一九年）
(15) 「全集」第一八巻、八七二ページ
(16) 「慶應義塾出身名流列伝」による。
(17) 飯田宏「静岡県英学史」六一～二ページ
(18) 「全集」第一七巻、四八四ページ
(19) 「全集」第一七巻、五四八ページ
(20) 宮武・西田「明治新聞雑誌関係者略伝」による。
(21) 「全集」第一八巻、四七二ページ
(22) 「全集」第一八巻、七二九ページ
(23) 復刻版「慶應塾義入社帳」第二巻
(24) 森田勝之助については、松崎、前掲論文参照
(25) 復刻版「朝野新聞」（べりかん社刊）による。
(26) 南日本新聞社「郷土人系・上」六二ページ
(27) 注(26)
(28) 宮武・西田「明治新聞雑誌関係者略伝」による。

第1表　慶應義塾精干社員一覧　　典拠：慶應義塾入社帳等

氏名	出身地	身分	入社年月日	年齢	卒業年月	在塾期間	撮影時年齢	所属
			年 月 日	歳	年 月	年	歳	
高島　鉱橘	熊谷県・上野国群馬郡厩橋向丁		9.3.	12.9			16.6	本科5－1
国枝　義光	高知県・土佐国12大区1小区12	士族	9.11.13.	19.10			22.11	本科2
波多野　一	山口県・周防国山口本町	士族	10.4.2.	19.	13.7.	3.3	21.8	本科2
梅木　忠朴	愛媛県・伊予国温泉郡玉川町	士族	10.10.	18.10	14.7.	3.9	21.0	科外丙
坂井　次永	青森県・田名部町	士族	11.1.	18.	13.12.	2.11	19.11	本科2
久野　英吉	三重県・伊勢国度会郡田丸	士族	11.1.14.	20.	14.12.	3.11	21.11	科外乙
広田　輹平	兵庫県・淡路国津名郡柳沢村	士族	11.2.18.	23.			24.10	(科外丙)
高橋　正信	東京府・本所緑町	士族	11.2.18.	20.9	13.12.	2.10	22.7	本科2
盛　与三郎	高知県・阿波国名東郡和田村	平民	11.9.12.	17.10	13.7.	1.10	19.10	本科2
井出徳太郎	高知県・阿波国名東郡助任村	士族	11.10.21.	20.3	13.4.	1.6	21.5	本科1
黒川　正	静岡県・駿河国駿東郡沼津駅片端町	士族	12.1.	22.10	13.4.	1.3	23.9	本科1
和田基太郎	大分県・豊前国下毛郡中津町	士族	12.2.11.	16.7	15.7.	3.5	17.5	予備科1
宮内　直挙	愛媛県・伊予国温泉郡松山口屋町	士族	12.3.3.	20.2	23.特		20.11	本科2
豊嶋　満俊	愛媛県・伊予国温泉郡松山木屋町	士族	12.3.3.	17.2	39.特		17.11	本科3
岩崎　居貞	高知県・阿波国名東郡富田浦町	士族	12.6.10.	21.10			21.7	科外丙
枝元　長辰	鹿児島県・大隅国姶羅郡加治木反土村	士族	12.9.15.	17.11	13.7.	0.10	18.2	本科3
池内源太郎	鹿児島県・日向国臼杵郡富岡村	士族	12.9.28.	21.	13.12.	1.3	21.3	本科2
渡辺　脩	愛媛県・伊予国北宇和郡岩谷村	平民	12.10.9.	19.	14.4.	1.6	19.2	本科3
森田勝之助	和歌山県・伊都郡妙寺村				23.特		17.	予備科2

注，豊嶋一改姓，浅岡．

(参考)

奥田直之助	鹿児島県・日置郡串木野郷上谷村	士族	11.6.	19.9	14.7.	3.1		本科2
蜂須賀次郎	名東県・阿波国名東郡大岡510番地	士族	8.7.5.	15.8				本科2

第2表　精干社員進級状況　　典拠：慶應義塾学業勤惰表

	明治9			明治10			明治11			明治12			明治13			明治14			明治15		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III
高島　鉱橘	童 3ハ	童 3ロ	—	大 3-1	大 2-2	大 1-2	大 1-1	大 1-1	大 1	大 1	大 1	5-1	4								
国枝　義光			—	大 1-2	大 1-2	大 1		4-2		科外	科外 甲	2	2	2							
波多野　一				大 3-2	大 2-2	大 2	大 1-2	大 1-1	5	5	4	2	2	①							
梅木　忠朴							4-2	4-2	4-2	4	4	科外 丙	3	2	1-2	1	①				
坂井　次永							4-2	4-1	4-1	3	3	2	2	1	1-1						
久野　英吉							大 1-1	大 1-1		科外	科外 乙	科外 乙	科外 乙	△	2	2	1-2	①			
広田　輟平							大 3		科外	科外	科外 丙										
高橋　正信							5	5	4-2	4	3	2	2	1	(1-1)						
盛　与三郎									4-1	3	2	2	2	①							
井出徳太郎									4-1	3	3	1	①								
黒川　　正										2	2	1	①								
和田基太郎										大 2	大 2	予 1	5	△	3	3	2	2	1	①	
宮内　直拳										4	3	2	2	1	1						
豊嶋　満俊										4	4	3	3	2							
岩崎　居貞											科外 乙	科外 丙	科外 乙	△	科外 丙	科外 丙					
池内源太郎												2	2	1	(1-1)						
枝元　長辰												3	2	①							
渡辺　　脩												3	3	2	1-2	①					
森田勝之助										大 3-1		予 2	予 2	予 1		5	3	3	2		

（参考）

奥田直之助								4-1	4-1	3	3	2	2	△	1-2	1	①				
蜂須賀次郎	大 2-2	大 2-1	—	大 1-1	5-2	5-1	4-1	4-1	4-1	3	3	2	2	2							
（明治8）		大 3	大 3-1																		

注1．I期（1月—4月）II期（5月—7月）III期（9月—12月）
注2．明治9年　学業勤惰表現存せず〔—〕
　　13年　学業勤惰表一部欠損あり〔△〕

第3表　森田勝之助の聴講した三田演説会

年月日	演説者	演題
12.5.24.	永井好信	
	*堀　龍太	
	河野捨三	
	永田一二	
	加藤政之助	
	工藤精一	
	福澤諭吉	
12.9.27.	中村英吉	県会の効能
	長岡兼次郎	東西の異点
	石沢命世	学士の弊
	雨山達也	朋党論
	草間時福	東洋連衡論
	福澤諭吉	富家の子弟教育の事
12.10.11.	林　欽亮	案外の説
	伊藤茂右衛門	地租政正論
	雨山達也	干渉の得失
	永田一二	交際の利害
	草間時福	地方士族未来記
	浜野定四郎	結社論
	福澤諭吉	門閥論(前々会の続き)
12.10.25.	渡辺　脩	干渉論
	松山誠二	遺伝論
	鎌田栄吉	社会動静論
	永田一二	外交論
	草間時福	往来通信論
	福澤諭吉	交通論

*外員　　典拠：三田演説日記

第4表　精干社員と三田演説会

氏　名	年月日	演　　題
渡辺　脩	入学　明治12.10.9. 19歳	
	卒業　14.4.	
	12.10.25.	干渉論
	11.8.	婚姻制限論
	11.22.	暦論
	13.1.10.	内乱と外寇といずれか最も恐る可きか
	1.25.	門閥漸盛
	2.28.	国力平均の説
	3.13.	風俗改良の変則法
	3.27.	圧政と卑屈の関係
	5.9.	読書の説
	5.22.	夢の説
	6.26.	進取の説
	7.10.	釣り合の説(地方の衰弊)
	7.24.	世上の穴
	9.11.	信任論
	(9.25.	雨乞の説)
	(10.9.	仁愛論)
	11.13.	人望論
	11.25.	雨乞の説
	12.11.	理論と実務の関係
	14.1.8.	公利公益の説
	2.12.	習慣の説
	2.26.	仁愛論
	3.26.	富の勢力
卒	5.28.	和同一致
	7.9.	見小遣大の弊
	9.10.	宗教論
	9.24.	表裏論
	(15.3.11.	)
	4.8.	無事の説
高橋　正信	入学　明治11.2.18. 20歳9か月	
	卒業　13.12.	
	13.7.24.	後見人の説
	9.11.	道徳論
	9.25.	日本の女子
	10.9.	明治之日本
	10.23.	不測の害
	11.13.	意外の説
卒	14.1.8.	新年の祝言
	3.12.	図形之説
	3.26.	法律講習
	15.3.25.	食物之説

氏　名	年月日	演　　題
井出徳太郎	入学　明治11.10.21. 20歳3か月	
	卒業　13.4.	
	13.10.9.	欲の説
	11.27.	逸約の説(詐偽の説)
	(14.1.22.	快楽の説)
	3.12.	風潮論
	4.9.	快楽論（決死論）
	5.28.	精神改良の一大障害
	7.23.	卑屈論
	10.22.	恐怖の説
盛　与三郎	入学　明治11.9.12. 17歳10か月	
	卒業　13.7.	
卒	13.11.27.	言論の説
	12.11.	服制論
	14.4.9.	社会の無知
池内源太郎	入学　明治12.9.28. 21歳	
	卒業　13.12.	
	13.9.11.	廉恥の説（無廉恥の説）
	(10.23.	春を欲す)
	11.23.	短命を惜しむ
枝元　長辰	入学　明治12.9.15. 17歳11か月	
	卒業　13.7.	
	13.7.24.	勢力論（智力論）
坂井　次永	入学　明治11.1. 18歳	
	卒業　13.12.	
	13.10.9.	回教の説
和田基太郎	入学　明治12.2.11. 16歳7か月	
	卒業　15.7.	
	(14.9.10.	)
森田勝之助	入学　明治	
	卒業	
	(14.10.8.	)

典拠：三田演説日記，(　)内は郵便報知新聞による。

第5表　明治政談演説会演説者一覧

＊演題記録あり

	精干社員	明治14年									明治15年												
		4月10日＊	5月1日	15日＊	28日＊	7月3日＊	8月14日	9月18日	10月2日	12月11日	2月5日＊	19日＊	3月5日＊	19日＊	4月2日＊	15日＊	30日＊	5月7日＊	21日	6月4日＊	18日＊	7月2日	10月22日＊	11月19日＊
猪飼麻次郎											○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	
波多野承五郎		○	○	○	○		○	○	○	○														
鎌田　栄吉		○										○	○		○				○	○				○
高島小金治				○	○		○	○	○															
藤田　茂吉		○	○	○	○	○	○		○	○			○		○	○	○	○						
本多孫四郎		○	○	○	○	○		○	○															
犬養　毅		○	○		○	○				○														
渡部久馬八										○														
矢田　績											○			○										○
門野幾之進								○			○	○	○				○	○	○	○				
高木喜一郎		○		○	○		○							○									○	○
林　欽亮			○																					
津田　興二			○	○		○	○																	
渡辺　術	◎										○	○		○		○	○	○						
小出儀一郎													○		○	○			○		○	○	○	○
岡崎　亀雄				○	○	○	○	○	○															
原　猪作				○																				
小浦鉾三郎					○	○			○															
奥平　昌邁			○		○																			
須田辰次郎			○		○	○	○	○	○			○	○			○	○		○		○	○	○	○
岡本　貞然							○																	
井上　寛一										○														
枝元　長辰	◎									○														
矢野　貞雄										○														
山田　良作										○														
阪本　盛得										○														
山田　要蔵											○				○			○						
江口　高邦											○	○	○	○	○	○					○	○		
牛場　卓蔵											○	○		○		○								
森下　岩楠											○	○			○				○	○	○	○	○	○
雨山　達也												○					○	○						
北川　礼弼													○	○		○			○	○	○	○		
久代孝次郎														○	○	○		○		○	○	○		○
津田　純一															○	○	○							
江口　高寛															○									
村上　定																							○	○

典拠：郵便報知新聞

第6表　経世社演説会演説者一覧(明治14年)　　典拠：郵便報知新聞

	精干社員	☆	4月16日	4月30日	5月8日	5月22日	6月12日	6月26日	7月10日	7月23日	9月4日	10月8日	10月9日	10月10日	改進党員
			*		※*	*	※	※	※	*	※		※*	臨時	
小出儀一郎			○	○	○		○								
渡部久馬八			○								○	○	○		
高橋　正信	◎	☆	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
高島小金治			○												
矢田　績		☆	○	○	○	○		○	○	○					
渡辺　脩	◎	☆	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
山本　長道			○	○	○	○	○	○	○	○					
村田　豊		☆	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
北川　礼弼		☆		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
平賀　敏		☆		○						○	○		○		
福澤　諭吉				△											
浜野定四郎				△											
雨山　達也						○	△	△	△	○	○	○	△		
鎌田　栄吉						○	△	△	△	○					
門野幾之進								△		○			△		○
山崎　程者											○	○	○		
山田　要蔵												○	○		○
久代孝次郎											○	○	○		

＊印　演題記録あり

☆印　『平賀　敏君伝』(p.87－90)にみる経世社員

他に，浅岡(豊嶋)満俊，井出徳太郎，枝元長辰，坂井次永，渋江　保，芹沢得一

浅岡，井出，枝元，坂井……精干社員

枝元，坂井……豈好同盟員

△印　外員（客員）

演説会場：4月30日のみ三田演説館(学術演説会)，他は明治会堂(政談演説会，但，※印は政談討論演説会)

立憲改信党員：郵便報知新聞(明治15.11.7.—11.17)に連載された名簿による。

第7表　豈好同盟・東洋議政会演説会演説者一覧

典拠：郵便報知新聞

			豈好同盟（明治14年）								東洋議政会（明治15年）													改進党員
	精干社員	※	7月2日＊	7月16日＊	8月6日	8月20日＊	9月3日＊	9月17日	10月1日＊	10月15日	2月6日	2月12日＊	2月26日＊	3月12日＊	3月26日＊	4月9日	4月23日	5月28日＊	6月11日＊	6月25日	7月9日＊	10月8日＊	10月29日	
山崎　程者			○		○																			
池内源太郎	◎		○		○																			
井上　寛一		※	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○		○	○	○			○	○	○
波多野　一	◎		○	○	○	○	○																	
枝元　長辰	◎	※	○	○	○	○	○	○	○		○	○				○		○			○	○		
奥田直之助	○	※	○		○	○	○	○	○		○	○	○			○		○						○
矢野　可宗			○	○	○	○	○	○	○		○													
溝部　惟幾		※	○	○	○	○																		
坂井　次永	◎		○	○																				
大養　毅			○								○	○	○		○	○	○		○					○
藤田　茂吉			△						○		○			○	○	○	○	○	○					○
高木喜一郎				△																				
矢野　貞雄						○	○	○			○	○		○	○		○	○	○		○	○	○	○
高橋　周治							○	○	○		○		○		○	○	○		○				○	○
梅木　忠朴	◎						○		○		○	○	○			○								
尾崎　行雄											○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○
竹村　良貞											○	○		○	○	○								○
野田精一郎											○		○		○	○					○		○	○
矢野　文雄											○	○		○		○						○		○
松岡　直忠											○	○	○	○	○									
坂元　盛得											○	○	○		○		○				○	○	○	○
箕浦　勝人													○		○	○	○				○	○	○	○
小林　営智														○		○		○			○	○		○
加藤政之助																△								○
大江　孝之																	○							
竹内新次郎																	○		○		○			
久松　義典																					○	○		○
本山　彦一																						○		
桐原　捨三																							○	
																				休会	解散	中止	休会	

＊印　演題記録あり

※印　篠田鉱造『明治百話』P.292にみる豈好同盟員
　　他に篠田鉱造，波多野承五郎，本多孫一（孫四郎カ）

△印　外員（客員）

注．立憲改進党員については，郵便報知新聞（明治15.11.7—11.17）に連載された名簿による。

第8表　明治会堂演説会(精干社員)演題一覧　　※印　明治政談演説会

演説者	年・月・日	演　　題
渡辺　脩	14.4.3	政府の職務
	15.2.5※	恃む可きは夫唯壮年輩か
	2.19※	大阪明治日報を発兌せんとするを聞く
	3.19※	反動力
	4.15※	秩序を乱す者は誰そ
	4.30※	新聞紙の腐敗
	5.7※	無為策
枝元　長辰	14.12.11※	(演題記録なし)
高橋　正信	14.4.13	日清の関係・主戦論
	4.3	政治上の三時期
盛　与三郎	14.7.21	官民論
	10.12	我邦の志士須らく活眼を開くべし
井出徳太郎	14.7.21	我邦未た国会の起こらさるは果して如何なる原因に依る乎
	9.9	暴をふせぐの術果して如何
	10.12	未曾有の一大好機到来せり

典拠：郵便報知新聞

第9表　経世社演説会(精干社員)演題一覧　(明治14年)

演説者	月・日	演　　題
高橋　正信	4.16	男子政治
	5.8	国会の開設を遮る者は誰そ
	5.22	血涙を流すに非らされは事業成らす
	6.12	官員に政治談の自由を与えよ
	7.23	海(汝ヵ)の敵を愛せよ
	10.9	国権論
渡辺　脩	4.16	恐るべきは閾牆に在り
	5.8	圧制の起こるは敢て偶然にあらす
	5.22	政府の主義
	6.12	我政府の信用を論す
	7.23	日本政府の財政は困難にあらさるへし

典拠：郵便報知新聞

第10表　豈好同盟演説会(精干社員)演題一覧(明治14年)

演説者	月・日	演　　題
池内源太郎	7．2	会社の瓦解
波多野　一	7．2	陪審論
	7．16	国権拡張の方法を論ず
	8．20	祝すべきは開拓使処分か
	9．3	特別保護の性質を論ず
枝元　長辰	7．2	何をか善良政府と云ふ
	7．16	専制は人の好む所
	8．20	官有物を論す
	9．3	一商社の命脈奚ぞ社会の公益より重からん
	10．1	日本の政治家
奥田直之助	7．2	転はぬ先の杖
	8．20	人民の自由と衝突するものは夫れ只憲兵か
	9．3	時機失ふべからず
	10．1	当局者何そ輿論の向ふ処を察せざる
坂井　次永	7．2	中央集権の余波
	7．16	東洋人の無気力は偶然に非ず
梅木　忠朴	9．3	輿論は公共心を須って勢力あり
	10．1	革命の性格

典拠：郵便報知新聞

第11表　東洋議政会演説会(精干社員)演題一覧(明治15年)

演説者	月・日	演　　題
枝元　長辰	2．12	政府現今の主義果して如何
	5．28	反対党は先つ其目的を明にせよ
	7．9	其権大なれば其責亦重し
	10．8	一年間の進歩如何
奥田直之助	2．12	薬石を以て疾病を激動する勿れ
	2．26	是を此に堅けは必す彼に決す
	5．28	地方官に一言す
梅木　忠朴	2．12	世惑弁論
	2．26	国家の憂

典拠：郵便報知新聞

第12表　交詢社に入社した精干社員

氏名	住　　所	職業	
国枝　義光	芝区三田三丁目7金子方	英学者	b
波多野　一	芝区三田四国町9松本方	英学者	b
坂井　次永	陸奥国下北郡田名部小川町	英学者	b
広田　輹平	淡路国津名郡柳沢村	英学生	a
高橋　正信	芝区三田二丁目慶應義塾		b
盛　与三郎	芝区三田四国町5山本新平方		c
井出徳太郎	芝区三田四国町5山本新平方		c
池内源太郎	麹町区三年町有栖川邸内島津方	英学者	b
枝元　長辰	大隈国姶羅郡加治木村枝元長英方	英学者	b
渡辺　脩	芝区三田二丁目慶應義塾	英学者	b
森田勝之助			d

典拠：交詢雑誌　5号（姓名録）明治13年3月　a
交詢雑誌 42号（姓名録）　14年3月　b
交詢雑誌 56号　14年8月　c
交詢雑誌220号　19年4月　d

第13表　精干社員その後　　典拠：各年度『慶應義塾塾員名簿』

氏　名	明治23年	明治29年	明治33年	明治44年
波多野　一	東京市京橋区新富町	山口県吉敷郡上宇野令村	山口県吉敷郡上宇野令村	歿
梅木　忠朴				神戸市兵庫三川口 市立兵庫実業補習学校
坂井　次永	青森県郵便電信局	青森県青森浦町 青森県郵便電信局	京都市三条大橋東詰 京都三条大橋郵便局長	京都市三条大橋東詰 京都三条大橋郵便局長
久野　英吉	東京市芝区新銭座町	歿		
高橋　正信	東京市麻布区飯倉片町	神奈川県戸太町戸部 横浜正金銀行	神奈川県戸太町戸部 横浜正金銀行	東京市芝区新堀町 横浜正金銀行
井出徳太郎	宮崎県宮崎上別府 日州新聞社内	東京市芝区西久保巴町 交詢社役員	（徳三郎）京橋区山下町 日本神士録編纂事務所	歿
黒川　　正	静岡県静岡西深草町	東京市四ツ谷区左門町 陸軍教授	東京市四ツ谷区本村町 陸軍教授	名古屋市東区東掘木町 私立名古屋中学教員
和田基太郎	大分県下毛郡中津町	大分県下毛郡中津町 中学校教員	大分県下毛郡中津町 雑	大阪市西区三条通 大阪毎日新聞社員
宮内　直拳	兵庫県神戸 山陽鉄道会社	兵庫県神戸市兵庫浜崎通 山陽鉄道会社員	兵庫県神戸市兵庫浜崎通 山陽鉄道会社員	大阪市南区天王寺夕陽丘
豊嶋　満俊 （浅岡）				東京府荏原郡入新井村 海軍造船大監
池内源太郎	宮崎県延岡本小路	宮崎県岡富村本小路	宮崎県岡富村本小路	宮崎県延岡町本小路 本小路衛生組長
渡辺　　脩	東京市芝区愛宕町	長崎県長崎市今籠町 一等郵便局長	香川県高松市三番町 香川県書記官	東京市麹町平河町 衆議院議員・会社員
森田勝之助	和歌山県伊都郡丁ノ町村	和歌山県伊都郡妙寺村 酒造業	和歌山県伊都郡妙寺村 酒造業	和歌山県伊都郡妙寺町 酒造業・貴族院議員
高島　鉱橘 国枝　義光 広田　輟平 盛　与三郎 岩崎　居貞 枝元　長辰				

（参考）

奥田直之助	鹿児島県串木野上名村	鹿児島県日置郡串木野村 県会議員	鹿児島県日置郡串木野村 県会議員	鹿児島市池之上町
蜂須賀次郎				